

503
50



始



503

50

事故本

P.165~170

マジ

73N36

503-50

婦人の使命

大正
11. 1. 24
内交

序

「人生は使命なり。人生の他の定義はすべて誤りなり」と、イタリヤの愛國者マチニは言つた。此の度の歐洲大戰は、世界の秩序の立て直しの序幕であり、人類がいつかは合奏すべき大シンフォニーの序曲とも見るべきであらう。しかし此の戦争は、人類の生活に大なる覺醒を促せると共に、社會の各方面に一時的變をも來たさしめた。殊に女子が戦時從來の男子の任務を代理せるが爲に、女子の能力は著しく發揮せられ、その權利は伸長せられ、職業の範圍も擴張せられた事は、女子の爲又人類

の爲に、大に祝すべき事であるが、その結果女子がその自然の性に反して、男子の如くならんとする傾向のあるのは、戒むべき事である。

世界變動の波は、我が國の婦人界をも襲うて、種々の問題を惹起せる事件が頻發し、新聞や雑誌はそれが爲に賑はされ、甲論乙駁、女子をしてその適從する所を知らざらしむる有様である。しかし女子にして自己の眞の使命の何たるやを自覺したならば、また世間の浮説に惑はされて、一生を誤る如き事はあるまいと思ふ。著者の信ずる所によれば、女子の眞の使命は賢良なる母たるにある。その事は今後世界に如何なる變動があつて

も、人類に兩性の存する限り、渝る事はないと思ふのである。

本書は此の見地に立つて、母性中心主義を高調したものである。その他、結婚の問題、女子の能力、教育、家庭、社會生活に關する問題等の考察をも行つたが、歸着する所はやはり、女子は母に生きよといふ事である。今後我が國女子の活動範圍の擴張、權利の伸長も固より望ましい事で、この方面の努力も大に必要であるが、その爲に母性を犠牲にしてはならぬと考へるのである。

本書は著者が最近數年間、折に觸れ時に臨みて研究せるものから選集したものである。従つてその文體もまた様々である。

序
 本書が我が國女子の行くべき道を照らす一つの小さな燈火たるを得ば幸である。

著者誌

婦人の使命

目次

- 一 女……………
- 二 若き婦人に……………
- 三 母性中心主義……………
- 四 結婚の倫理的解釋……………
- 五 義理と人情……………
- 六 同居か別居か……………
- 七 兩性と社會……………
- 八 妊娠と出産……………
- 九 母の完成……………

目次

一〇 昔の婦人と今の婦人……………一五四

一一 女性の種々……………一六〇

一二 有名と無名……………一七三

一三 戦争の婦人に及ぼす影響……………一七九

一四 戦後の女子教育……………二二六

一五 女子の知的能力……………二四九

一六 女子と哲學……………二七八

一七 愛の教育……………三〇六

一八 若き女教師に……………三一九

目次終 使命

婦人の使命

文學博士 下田次郎著



女とは如何なるものかとは、人間始つてからの問題で、未だに分らぬ。あの遠方の彗星さへ正體が分るのに、家の内といはず、往來といはず、毎日朝から晩まで、見どほしに見て居る女が分らぬとは、奇怪千萬。何のための學者ぞ、詩人ぞと、憤つて見ても、分らぬものはやはり分らぬ。中には女のために酷い目にあつて、我が

女

二

一生の不作この女にありと、溜息とともに、婦人觀を唸り出して居る者もあるし、女なくんば世は荒野なりと、無闇に婦人を拜んで居る者もある。やれ如菩薩の、小人のと、釋迦も孔子もそれぞれの見當言ひ置いて、亡くなつた後に、依然として在るものは、昔ながらの女であります。それならば女は一體何であるか、何うなればよいといふのか。學者も詩人も、裏店の亭主も頭をひねり、腦を痛めて居るのは、この問題でありませう。

今少しく女についての昔からの考を述べて見ませう。印度の話に斯ういふのがあります。神様が、時の始めに、世界と男を拵へました。拵へ終つて、女を造らうとされると、男を造るときに材料を使つて仕舞つて無い。固形物は盡きた事が分りました。そこで神様は色々考へられた末、面白い考が浮んで、斯んなものを取り混ぜて女を造られました。それは月の圓さと蛇のうねり、樹の枝の撓さと草の戦ぎ、若草のしなやかさと花の觸り、葉の軽さと牝鹿のにらみ、陽炎と雲の涙、風の浮氣と

兎の臆病、孔雀の虚誇と雀の胸毛の柔かさ、ダイヤモンドの堅さと蜜の甘さ、虎の殘酷と火の暖さ、雪の冷さと椋鳥の饒舌と鳩の鳴聲。これだけのものを混ぜ合して、女を造られました。さうしてそれを男に與へられました。ところが八日すると、男が神様の所にやつて来て、申しますには、「私に下さりました者は、絶え間なく饒舌つて、私の時をまるで取つてしまひます。また彼の者は、何處もわるい所もありませんが、しかし何時も不快です。それで私は彼れとはとても一緒に住むことが出来ませぬから、御返しに參りました」と申しました。そこで神様は此女を取り返されました。ところが八日すると、男がまたやつて来て、神様に申しますには、「彼れを御返し致しましてからは、何だか寂しくてなりませぬ。彼れは私の前で踊り、歌ひましたし、又眼の隅で私を見て、私を楽しめ、賞めて呉れたことが忘れられません。」と申しました。そこで神様は再びこの女を男に返してやられました。三日すると、また男が如何にも鬱々としてやつて来て、「何といふ譯か分り

ませぬが、兎に角此の者は私に愉快を與へるよりは、苦みを與へることが多いですから、どうか今一度御取もどしを願ひます」と、嘆願いたしました。そこで流石の神様も御怒りになつて、「何々でもするがよい」と叫ばれました。男は困つて、「しかし私は女と共に生活することは出来ませぬ」と申しましたら、神様は「お前は女なしに生活は出来まいぞ」と仰せられました。男は「さても私は憫れなものである。私は彼の女と一緒に住むことも出来まいし、彼の女なしに住むことも出来まい」と、溜息を吐きながら、すぐごとと歸りました。

これは印度の古い作り話ですが、女子の性質を或點に於て、能く穿つて居る所がありはしますまいか。

西洋では聖書に女子の出来たことが書いてあります。それによりますと、天地創造の六日目に、神様が、その形に似せたアダムといふ男を造られました。神様はまたこれに適ふ助者を造らんと、アダムを熟く睡らしめ、睡りし時、その肋骨の一つ

を取つて、女を造つて、これをアダムの所に持つて行かれました。アダムの言ふには、「此こそわが骨わが肉の肉なれ。此は男より取りたる者なれば、之を女と名くべし」と。この女をエバといひまして、女の初としてあります。ところが、その睡りして暮して居たエデンといふ樂園に、或る樹があつて、その實を食べてはならぬと、神様の言附がありました。然るに蛇がエバの耳に囁き、エバを誘惑はして、その實を採つて食はしめ、夫のアダムにも食べさせました。そのために人間は極樂から逐ひ出されて、罪の人となりました。その發頭は即ち女であるとしてあります。そこで或僧は「女子よ汝は常に喪服を着け、襤褸を纏ひ、涙を浮べて歩くべきものなり。汝は人類を墮落せしめたればなり」と申して居ります。

以上は女を悪く見たもので、佛教の經文にも比丘尼經の女子八十四態の如き、随分思ひ切つて女を悪く言うてあるものがあります。昔は一體女は良く言はれて居りませぬ。さうかと思ふと、今から六七百年前には、西洋では、大層に女を尊敬

し、殆んど拜まぬばかりに崇め出しました、西洋武士道の粹は實に婦人を敬ひ、よくこれに仕へ、これを助くるにありました。今日西洋で女子といへば、レディーと崇めて、演説などにも、「淑女紳士よ」と、先づ女が出るのも、日本人までがこれを真似るのも、基く所は中世の女の崇拜からであります。

人間の居る所には、女が居る。女が居る所には、女とは如何なるものかとの問が起る。これは文明人も野蠻人も、黄人も、白人も、黒人も同じであります。そこで、エジプト邊りの昔の黒ん坊も、矢張り考へたと見えて、女については、こんなことを言つて居ります。鐵は強し、されど火はこれに勝つ。火は強し、されど水はこれに勝つ。水は強し、されど太陽はこれに勝つ。太陽は強し、されど雲はこれに勝つ。雲は強し、されど地はこれに勝つ。地は強し、されど人はこれに勝つ。人は強し、されど苦痛はこれに勝つ。苦痛は強し、されど酒はこれに勝つ。酒は強し、されど眠りはこれに勝つ。されどすべての物より強きは女なり。」

どんな経験から得たか知らぬが、女の力の大きなるを稱へた文句としては、なかなか強い。我國では「日の本は岩戸神樂の昔より、女ならでは夜の明けぬ國」などと申しますのは、その言葉は短いが、女の力をよく言ひ表はして居ります。支那には「女の髪は大象の鬚と繋ぐ」とあります。ただ願ふは惡に強からずして、善に強いことでもあります。獨逸の詩人シルレルは、「女の力」といふ詩を作つて、女の力といふものは、其の美である、女子が美を示しさへすれば、女子は世界を支配するといひ、詩人ゲーテも、「ファウスト物語の最後の所に、「久遠の女性的性質が我等を導く」と言うて居ります。しかし女性の美、うるはしさは、唯容貌のみではありますまい。その精神だらうと思ひます。

なほ女子については、色々の事が言はれて居ります。「婦人の笑顔を見るまでは、世界は悲しく、國は荒れ、男は溜息つける隠者なりき」といひ、「地上の最も高尚なるものは、良く出来たる婦人なり」といひ、「造化の最もうるはしく、最後且最良の

ものは、婦人なり「最もよく飾られたる腰掛けは、徳ある婦人の坐せるものなり」といふが如きは、いづれも女子を理想的に見たものであります。

また「女子は柳なり。微風に屈むも、嵐にも折れず」とは、所謂柔克剛を制するの意であり、「要するに女の強みは其の弱みである」と、音楽の符號で、旨い事を言つたのも、同じことです。「舌存して常に齒の亡ぶるを見る。剛強は終に柔弱に勝たず」と、支那人も言つて居ります。

女はまた脆い。「脆きものよ、汝の又の名は女なり」とは、詩聖セキスピアの有名な句であります。しかしその脆いのは、女の感情が強いからで、感情の強いのは、やがて女の愛嬌ともなるのであります。要は唯悪の誘惑に脆からずして、善に脆からんことでありませう。涙脆いも、女の特色であつて、「女は泣かうと思へば、いつでも泣く」とか「女は衣襟に涙の小瓶を、いつも持つて居る」とかいはれて居ります。キングスレーは、「稼がにやならぬ男の身、泣かねばならぬ女の身」と言ひました。

女の泣くのは、男とは大分意味が違ふやうで、泣くよりつらひ思ひは、男ならぬ者には、分りにくいかと思ふ。つまりは泣いて、一時の悲みを流すので、感情の夕立ともいふべきでせうか。固より深い悲み泣きもありませうが。

要するに、女は昔から褒められたり、貶されたりして居ります。ボーブの如きは、「女は一番良くても矢張り矛盾である」と、悟り抜いたやうなことを言つて居ります。これも女がどうも分らぬ苦し紛れに言つたものと思ひますが、なかなか意味ある言葉であります。實際女子問題となると、矛盾だらけで、例へば妻母としての務と職業、家庭の仕事と社會的活動等、如何に調和すべきか、一方がよければ一方がいかにやうである。西洋でも二十世紀の問題は、労働問題と、この婦人問題である、學者も經世家も頭を悩めて居ります。しかしこれは第一女の性質に、この矛盾か潜んで居るのではないかと、疑うて居るものもあります。

要するに、女は如何なるものかは、人間始つてからの問題で、今以てよくは分ら

ぬ問題であります。而して各人の考は、その見た女子に據るので、良い女子を見て居るものは、女子は良いものであるといひ、悪い女子を見て居れば、悪いといふ。男子の女性観は、その妻や母に由りて定まるといはれるのも、その事でありませう。しかし世に良い女が多く、悪い女が少くなるに従つて、女は如何なるものかの考が、良い方にのみ向つて来て、遂に女の身體精神共に、活ける菩薩であるといふ結論に、一致するに至ることでありませう。我々が女子の爲に努めるのも、つまりはこの理想を追ふためであります。

二 若き婦人に

天に星あり、地に花あり、而して人には若き婦人がある。星の輝き、花の匂ふ限り、人には若き婦人があつて、常に人に望みと喜びとを與へる。

「人類の運命と將來とは、若き婦人に宿る。萬物の靈長たる人を生むべく、生れたる若き婦人の身體が、如何にうるはしく、如何にふくやかに、人をして唯その美に恍惚たらしめ、その出現に向つて、天を讚美せざる能はざらしむるは、固よりその所である。ミルトンをして、造化の最もうるはしきものと歌はしめたる、唯詩人の形容とのみ見るべきではあるまい。古往今來の詩人は、婦人の美を歌ひ、而してこれを世界に出現せしめたる造化の智と能とを嘆美すべく、自分も生れたのではないか。否、造化は、己れが傑作に向つて、讚美の詞章を捧げしむべく、詩人をも作つ

たのではないか。

若き婦人の身體は、人の子を生むべき運命の具體的象徴である。活氣と希望に満ち、大なる將來を齎らしつゝ、生れ出づる玉の如き嬰兒は、若き婦人ならで、誰かこれを人の世に贈るべき。

若き婦人の身體には、無限の意義と含蓄がある。現在斯かる身體を有して、若き婦人と名乗り得る人々に向つて、我等はその榮えある今の生を祝し、その自重を望まねばならぬ。

若き婦人の心こそは、くしく、いみじきのものである。鳩の胸毛のそよぎにも譬へつべき多感なる性情は、若き婦人の生命である。そのはにかみは、何を語るものであるか。最も僅かなるあはれ、かなしみにも、心を動かし、感情を漲らせて、命の流れなる血管に、浪打たせるではないか。あゝはにかむ人よ。我等はその感性の微妙、その良心の鋭敏を愛するのである。鐵面皮の世に、尙はにかむ人あるを見るは、う

れしいことではないか。

若き婦人はよく笑ふ。矛盾衝突の痛みを知らず、唯これを美的に見るものにして、始めてよく笑ふことを得るものである。よく笑ふ人よ。嘲笑、冷笑、空笑、而して泣笑。笑ふことすら十分に出来ない世に在つて、眞底から笑ふことの出来る若き婦人は、幸福ではないか。

人の泣くは憐れである、氣の毒である。唯それだけである。しかし若き婦人の泣くのは、美しい。雨に惱める海棠などと形容したものもある。されどその泣くや自己の運命に泣くにあらずして、人のあはれに泣き、人の運命に泣くのである。若き婦人は眞に泣くべき何ものをもつて居るか。若き婦人は泣くに於ても幸福である。若き婦人は、如字的に人生の花である。植物はその花をもつて、枝を飾るとき、その全盛に誇りつゝ、秋の實のりを豫想せしめる。人の花なる若き婦人よ。君等の身體及び精神は、何を意味し、何を語るかを知るか。世は君等の現在の如く、春ば

かりではない。眞に泣くべきこともあらう。泣くよりつらい笑ひ方をせねばならぬ時もないでもあるまい、されど若き君等がもてるその罪なき心、いみじき感性、鋭き良心を、いつまでも持ち続け得るならば、秋の實のりは知るべきではないか。

三 母性中心主義

地球上に始めて生物の現はれたのは、少くも數千萬年の昔の事と考へられる。この數千萬年の間、自然は少しの休みなく向上の一路を辿つて、謂はば非常なる根氣と努力を以て、原始の單細胞の生物から、遂に人間を創造するまでに漕ぎつけたのである。更に溯つて無機物から、單細胞にせよ、有機の生物が造り出されるまでの自然の忍耐強き準備を考へて見ると、先づ火の玉の太陽から地球が飛び出し、太陽の周圍を地球の年齢ほど廻轉して居る中に、表面が冷却して、水と陸が分かたれ、空氣で包まれて、生物の出現すべき條件が整へられたので、地球の成立の抑々か

ら、絶えず生物を出現せしむべき方向に、地球は進行して居たといへるのである。其時間は、最初の生物が地球上に現はれて、人類にまで進化するに要せる時間よりは、遙に長いものであつたに違ひない。して見れば、生物を出現せしめようといふ事は、地球成立以来の謂はば目論見で、否地球の母體たる太陽に、地球が宿つて居た時からの目論見である。故に一たび地球上に生物の出現せることは、それまでの自然の努力が報いられた譯で、自然にとつては生物は虎の子のやうに、大切に大切にでならぬものである。そこで生物には皆自己を保存しようとの強い努力、即ち強烈なる生存の慾なり傾向なりが具はつて居る。而して下等の生物よりも高等の生物を造り出すには、一層自然の手がかゝり、物入りが多かつたから、高等の生物ほど、自然から見れば大切な寶である。従つて生物は高等になるほど生存慾が強く、人類に至つて、最もそれが強くなつたものと考へるのは、論理の許す所であると思ふ。即ち人は意識的にどうかして死ぬまいと願ひ、そのあらゆる方法を講じ、生理學上

到底死なねばならぬ事が分ると、死んでも命があるやうにと、宗教といふものを作つて、死後の生活といふ事まで、信ずる者があるやうになつたのである。即ち宗教は人間の生存慾の嵩じた結果である。他の動物には宗教はない。それほど生物は、殊に人間は自己の保存に努めるものである。といふのもその背後に自然があるの、生存は個體の願ひでなく、實は自然の願ひである。而して自然は生物個體を生存せしむべく、飢餓又はそれに相當する衝動を生物に與へ、又それを充たすべく食物を與へた。

しかし生物個體はどうせ死滅せねばならぬから、その代り自然は個體に子孫を造らして、その種を繼續せしむることをする。その手段の一つとして、雌雄又は男女兩性の間に愛なるものを生ぜしめて、これに由つて兩性を相牽引、合資せしめて、女性に子を生ます工夫をした。即ち自然から見れば兩性の個體は、後繼者を造らしむる方便物で、子さへ造つて獨立できるまでに仕ておいてくれれば、親には用はな

いのである。それで生殖能力がなくなれば、情け容赦もなく、老年を以て、死を以て自然は之に報いる。しかも生存の否定は兎に角自然は不賛成であるから、個體の最後にも、死の苦痛を以てその意を表するのである。

愛は兩性を合資せしむるための磁石で、種の繼續といふ自然の目的を實行する前、褒美として、自然が兩性に與へたものである。愛は自然から見れば、種の繼續の方便であるが、兩性の個體から見れば、目的そのものとなつて、子を造らぬ前に、愛の犠牲となつて果てるものすらあるのは、自然の藥が利きすぎたので、自然はその筈ではなかつたのである。

これを要するに、生物個體の生存と種の繼續とは、自然の一大努力の目的である。この目的の爲に、自然は生物に飢餓と戀愛とを與へ、個體に營養物を取らしめ、生殖を行はしむることとした。即ちシルレルの言ふやうに、飢餓と戀愛とは、生物を根本的に支配する動因である。(植物に於ては飢餓とか戀愛とかいふ意識的の慾はな

いが、營養物を取り、雌蕊と雄蕊の生殖子の融合がある。)而して個體の保存に必要なる食物を取るといふ一事に於ては、兩性に於て大した違ひはなく、大概同じやうなものであるが、生殖に關しては兩性に分業があるのみならず、其女性の關與する部分は、男性のそれよりも遙かに大なのである。今左にその事を少しく述べて見よう。

二

生殖の方法は、これを大別して無性生殖と有性生殖とに分ける。(一)無性生殖とは雌雄二個體の生殖細胞の融合を要しないで、一個體が分裂し、或は胞子を生じ、或は發芽して、子孫が出来るのである。下等の生物はこの方法に由つて生殖する。例へばアミイバは一個體が分裂して二個體となり、又それが分裂して四つの個體となるといふやうに繁殖する。分裂と同時に親は無くなり、出來た二個體は親が半分に

なつたので、親でもあり子でもある。胞子に由る生殖は、親の体内から胞子を生出して、それが個體となるので、是には親が残り、そして子が出るのである。しかしその親は唯一つであつて、男性とも女性ともいふ事はできない、唯親といふ外はない。隠花植物や胞子蟲は、この生殖法に由つて子孫ができる。出芽生殖といふのは、親から芽が出てそれが子になるのである。芋の蔓が又一つの個體となり、サナダムシの部分が獨立の個體となるが如きこれである。これらも親は男性とも女性ともいふ事はできないし、子にも性はないのである。即ち自然は初めには無性生殖のみに由つて、生物の種を繼續せしめたものである。(二)有性生殖 これは雌雄二個體の有する生殖細胞が合體し、その成分を融合して、それから子が出るのである。従つて個體は雄か雌であつて、生殖機關その他に於て形を異にして居る。無性生殖からこの有性生殖に進む中繼の生殖法に、接合生殖といふのがある。是には外見上同じやうな單細胞の二個體が接合して、双方の内容を一部分他に渡して、内容に新

成分を入れ、又離れて分裂生殖を爲し始めるものがある。かゝる二個體は見た所は同じやうで、實際どちらが雌とも雄ともいへないが、兎に角生殖するのに、或二個體の接合を要するのである。これが無性生殖から有性生殖に移る中繼である。有性生殖にも、雌雄同體、處女生殖、雌雄の世代交替等種々の形式があるが、この細かい事は略する事とし、その標準的なものは雌雄異體の生殖である、これは雌と雄の個體が別々にあつて、その接合に由つて生殖するので、高等の動物は皆この方法に由つて子孫が出来る。人類でいへば男と女とが生殖に必要である。

人類に縁の遠い無性生殖の事はしばらくおき、有性生殖に於て、兩性の生殖に與る分け前はどちらが多いかといへば、それはいふまでもなく女性の方が遙に大である。レスタリ・ウオードをして言はしむれば、男性は唯女性に授精する爲に、謂はば自然が後から思ひ附いて作つたものである。男性の用は、血統を交叉して種に變化を與へ、複雑なる素質を有する個體を生ぜしむる事にある。従つて男性は女性に

授精すれば、その使命は果たされたのである。それで下等の動物には、その用がすめば、男性はすぐと死ぬるものがある。かゝる男性は唯授精せんがために生れたのである。高等動物に於ては男性がすぐと死ぬる程ではないが、しかしやはり一時死を彷彿せしむるほどの可なりの消費である。授精に於て男性の使命は果たされたが、女性には受精後に大役が課せられる。即ち妊娠、出産、哺乳これである。男性にはそれに相當する生理的の賦役はない。植物でも花粉が散つて雌蕊に附けば、雄蕊は萎れてしまふが、雌蕊はこれから勢を得て成長して、實となり、その實から子が出来る。即ち雄の命ははかないもので、雄の死せる後雌は榮えるのである。それは受精後子を生むといふ役を果たさなければならぬからである。高等動物に於ては、雄の運命は下等動物のそれの如くはかなくはないが、職能上からいへば同じものである。雄は生殖に費す身體の精力が、女子ほどに大でないから、精力の大部分を自己一代の活動に費し、花火の如く派手に散つてしまふ。雌は之に反して、身體の精

力を子を造るために蓄へ、使はねばならぬから、自己の活動の爲に餘り消費しない。従つてその生活は地味で、活潑でない。即ち男性はカタボリズム（異化、消費、破壊の主義）を代表し、女性はアナボリズム（同化、蓄積、構成の主義）を代表すると云ふことができる。

三

斯様に説き來つた所から見ると、女性の天職は子を生むといふ事、即ち母になる事にあるので、「生めよ、繁殖よ」とは、自然が女性に下した無上命令である。即ち子を生まない女性、母にならない女性は、自然の期待に背くので、自然に言はしむれば、それなら造るのではなかつたのである。自然は生々の原理であつて、萬物を生ずる永遠に若き「母」とも見るべきである。而して生殖に與る部分は、女性の方が男性より遙に大であるから、換言すれば女性は種の繼續といふ自然の努力に贊同

し、貢獻する事が大であるから、自然は男性よりも女性を大切に、生理的に生活の便宜を多く與へて居る。即ち女性は生活の適應性が大である。男の兒よりも女の兒はよく育つし、女子は空氣、食物、睡眠等の不足缺乏にもよく堪へ、且概して病氣や創傷もよく癒え、又長壽である。要するに女性は自然の寵兒である。それといふのも子を生ます爲であり、又その褒美でもある。

以上は有性の生物界一般の事であるが、人類に於ても同じ事であつて、婦人はやはりこの自然の寵兒たる特典を有して居るのである。男の生活は生理的には波瀾なく、平坦なる道を行くが如きものであるが、婦人には血潮の満干があつて、四週目に一回の高潮があり、可なりの量の血液を失ふ。セルハイムに依れば、婦人がその爲に一生涯に失ふ血液の量は、自己の體量の二倍である。而してこの毎月の出來事は、毎月の波動的生活の波頭であつて、その前後にも生理的波瀾はあるのである。従つて婦人の自然の生活は、海上の波を乗り切るやうなもので、男子の生理的生活

の坦々たるものとは違つて居る。而してこの月經のある間は生産能力があるので、それが閉止すれば子は生めない。即ち子を生む身體でなくては、月經はないので、月經のある意義は、子を生むといふ事の外にはないのである。

身體が成長してしまふと、生殖作用が始まる。即ちこれまで成長に要せる物資を生殖の方に廻はすのであつて、生殖は體外にの成長といへるのである。従つて女子に生殖作用のある間は、やはり成長して居るやうなものである。成長して居る間は、若いのであるから、女子は生殖能力の存する間は、若さを保存して居るのである。この若さは子を生むためであつて、男子が若い女子を愛するのは、子を生む爲である。生殖能力を失へば、若さと女らしさを併せ失ふやうになり、女が中性的になる。要するに、女の若さは子を生むものとして意味があるのである。妊娠中は心臓、肺臓、腎臓、肝臓は凡そ其活動を倍する。それは自體と胎兒の二人分を養ふためである。男子にはこれに相當する生理的奮發はなく、男の體制で

は、腹の兒を宿すことは思ひも寄らぬことである。而していよいよ出産すると、体内に大負傷をなし、多量の出血をなすに係らず、三週間もすれば元に戻り合して並みの身體となり、産が順當であれば、却つて消失よりも補償が多くて、一層健康になる。女子の身體は不思議に弾力のある身體である。男子の身體にはこれだけの弾力はない。女子の身體は子を生ます爲めに出来たのである。子が生まれると、哺乳が始まる。生身には餌食あり、乳房といふ天道のお扶持方（近松）。胸臆の中に於て甘露の泉を出して、子は生育する。女子が何の爲に乳房を有し、乳が出るやうに出来て居るかといへば、子を養ふ爲の外に意味はないのである。

以上述べた所を総合すれば、女子の身體は子を生む爲の身體としてより外には、解釋できないのである。女子は女子なるが故に、子を生んで母とならねばならないのである。

一體身體の機關といふものは、皆それぞれ生活上の意義があり、用があるから存

在するので、之を適度に働かすといふ事は、心身の利益である。無用のものなら、始めから自然がこれを造らない。又使はずに居れば、男の乳房の如く退化する。退化せず立派に生理上意義のある機關は、その機能を行はしめねば、自然の造つた主旨に戻るの、心身に不利益である。生殖機關は地質時代の生物に用があつて、今日は不用の退化機關ではないのみならず、子を造る大切な機關で、身體のあらゆる機關中でも、自然が重きをおいて居るものであるから、生理に叶ふ正常なる生活を営むには、生殖作用を適度に行はしむることが必要である。即ち女子としては結婚して子を生むといふ事である。適度の生殖作用は、その機關の機能を活潑にし、心身に満足と好影響とを與へ、生殖腺の内分泌の作用も十分に行はれて、女子をして、心身共に最も女らしくするものである。健康の女ならば、出産は一般に身體に有利であり、哺乳育児は女性を眞に女性たらしむる所以である。これに反して獨身生活は自然の賛せざる所であつて、その心身に於ける影響は徹底的である。それは

自然が勘定を取るからである。愛の強烈なる、總身を根こそぎに揺る要求が満たされぬといふ事が、如何に心身に不本意なる影響を與へるかは想像するまでもない、事實が澤山これを證する。「古來尼さんにはヒステリーの者が多い。殊に有名なるセント何々と言はれるやうな尼さんの多數は、高度のヒステリーであつた」と、エリスは言つて居る。獨身の婦人にはヒステリーか、それに近い人が多い。又神經衰弱や、感傷的で、喜怒哀樂の變化の劇しい人が多い。それには生活上の壓迫や苦勞、心細さも手傳ふ事もあるが、生殖作用が適度に行はれないといふ事が與つて大に力がある。生殖作用が適度に行はれねば、生殖機關は萎縮し、その心身に及ぼすべき影響を不完全ならしめるからである。何如に金があつて物質的には足り足つた暮らしをして居ても、獨身婦人には何となく物足りなさがあつて、つまらなさ相で、九尺二間の裏長屋のお神さんにも見るやうな、一種満足の相を見る事が出来ない。即ち女子は原則としては、どうしても結婚して母となる道行を踏み、又母とならねばならぬのである。

四

以上は主として生理的方面から、女子の母たるべき事を説いたのであるが、これから心理的方面から、自然は女子に何を要求するかを見よう。

「雉子の羽の錦も鶴の毛ごろも、子を思ふ折の色はかはらず」とか「山は焼けても山鳥や立たぬ、子ほどかはゆいものはない」とかいふ通り、母の子を愛する情には人も禽獸も變りはない。其母の愛は下等の生物の雌から、長い進化の過程を経て發展したものである。植物に於ても、有花植物に進むと、最初の母性が現れる。即ち種子は外皮を以てよくこれを保護し、後日の爲めの食物即ち果肉を備へておくのである。動物では、昆虫の如き、雌は食物になりさうな葉に、又雨や敵から保護するため葉の裏に、或は葉を捲いて、ホームを作り、そこに卵を生みつけておく。

こゝに卵に對する母の配慮があつて、母親的本能の曙光を見るのである。しかし卵が孵化する頃には、母はもはや死んで居るので、子は皆孤兒である。毛蟲や蠶の如きこれである。蜘蛛の母は糸で卵を包み、身體につけて保護して居る。もし卵囊を捨ててもすれば、大騒ぎをして取り戻さうとする。中には卵が孵化した後も、或時の間脊の上に乗せて居るものもある。蟻や蜂は巢を造つて、卵を保護して養ふ。魚類は多數の卵を生みつけておいて、多くは母が保護せぬから、僥倖なものだけが孵へるのであるが、それでも適當な場所を選んで産卵する。蛙は川の上流を選び、鰻は海に下つて産卵する。中には子に危険が迫ると、口中に入れ、或は脊にのせて泳ぎ、又は連れて泳ぐものもある。兩棲類では、蛙は膠様の紐形又は圓形のものの中に、卵を包んで居る。又池の泥に穴を掘つて、そこに産卵するものもある。南米のピバといふ墓の雌は脊が蓮の實のやうになつて居て、その中に雄が卵を押込んでやり、孵化するまで脊負つて居る。蛇は木の根の下か、砂の中に産卵し、或大蛇は卵

の廻りにどくろを捲いて、孵化するまで食べずに番をして居る。龜は砂の中に産卵して、砂をかけておく。鰐は砂に深い穴を掘つて卵をおき、孵るまで母がその上に眠る。或人は母鰐の不在中、周圍に丈夫な垣をしたところ、垣の下に穴を掘つて、卵を他所に持つて行つた事を報じて居る。

これらの動物に於ては、父が母を助け、或は巢を保護する事もあるが、多くは母が卵の保護世話をするので、親としての本能は常に母の方が強く、母の配慮から智慧が進むのである。鳥類になると、母が巢に卵を生んで、自分の體温で暖めてこれを孵へす。巢には羽毛を入れ、又はもやしのやうになつた木の葉などを入れて、暖くするものもある。歐洲の北海に居る鴨に似た鳥は、母が胸毛を抜いて巢に入れる。それを蒲團等に入れる爲に高く賣れるので、漁夫が取ると、母が又胸毛を抜いて入れ、後には胸が赤裸になる事があるといふ。「母鶏は二十一日間卵を抱いて居るが、その間に平均に温るやうに卵を上下左右に廻はして居る。そして初の十八日

の間は毎日一度づゝ餌を求めに出るが、孵る前三日間は全くの断食である。雛の出
て後は、羽翼の下に抱いて寝るので全く中腰である。どれ程苦しいか一晩やつて見
れば分る」と或本に出て居る。鳩は母鳥の餌嚢の内面の皮膚が、どろどろに溶け
のを、口から吐き出して雛に與へる。これを鳩の乳といふ。鵜の母は雛に胃の中に
嘴を入れて、半ば消化した魚を食べさす。鶏は餌を捜して、雛を呼んで食べさ
す。そして大きくて口に合ぬものは小さくして與へる。又燕のやうに空中で昆虫を捕
へて、何回となく巢に運ぶものもある。千鳥は敵が襲来すると、母鳥が蹶になつた
真似をして、敵の注意を自分によせて、雛を逃すこともある。これは危険に際して
の母の勇氣と智慧の一例である。極地の氷上に棲むペンギン鳥は、群居生活をする
が、母鳥が卵を孵へす時は、どんな事があつても巢を離れない。しかし寒くて孵化
がむづかしいから、親鳥で卵や雛を有つて居らぬのがある。さうするとなほ子が欲
しくなると見えて、他の親から養子をしやようとする。それで多數の母鳥が来て、

一つの卵又は雛を取巻いて、それを奪ひ去らうとする。さうはさせぬと、外の母鳥
が争ふ。すると夫まで妻に加勢して取らせようとして、あの不細工な風をしてもみ
合ふといふ。なほ鳥類には色々面白い例があるが、要するに、下等の動物よりは一
層母心が發達して、中には感動すべきものがある。父はやはり一般に子には冷淡で、
母が重に子の世話をするのである。

哺乳動物に至つて、哺乳といふ事を以てその名稱とする程で、その部門の動物
は、皆母の胎内で育ち、生れると母の乳で養はれる。卵生動物は字の如く卵を産む
ので、母と卵とは形が全く違つて居るが、哺乳動物は、親の形に似たところで、胎
内から出る。これは母が我子と認めるのに都合がよい。哺乳動物では、卵生動物よ
りも哺乳といふ負擔が母に加はるので、一層母は骨が折れる。且意識的に母子が相
認めるから、相互の愛着も下等の動物よりは強い。人間では人工營養でも子を育て
るが、他の哺乳動物は母の乳が出なければ子は育たない。それほど哺乳は貴いもの

である。人の母も他の哺乳動物を見倣つて、自分の乳で子を育てるのが、一番宜いのである。哺乳動物の母親は、下等の動物から母親としての修業を、進化上積み來つたものであるから、母親の子に對する心盡し、打込み方は一層強い。獸類の母は子が獨立するまでは、子を養ひ、可愛がる。それで敵や人を見ると、直ぐに逃げる犬でも、子を連れて居るときは、双向つて來るものがある。人の飼つて居る白鼠や犬猫でも、乳を吞せる子のあるときは、母の氣が荒く、人にも咬みつゝ、子でもとらうとすると非常に怒る。野獸でも危険なのは、子をもつた牝である。人の母でもその通りで、同じ年頃でも處女と母とは、餘程母が強い。エーゴは若い母親を牝虎に比し、「女は弱し、されど母は強し」といつて居る。子が側に居るときは、母親は何となくうれいので、満足げである。鯨は子を愛する情の濃かなもので、特に座頭鯨の如きは、子が半殺しにでも遇ふと、父は逃げるが、母は子を助けようとして、子をかばひ、遂に一所に殺されることがある。一度逃げても子を氣遣つて、必

ず又歸つて來る。それで子をつれた鯨は、子を殺せば屹度親が捕れるといふ。猿でも子を失つた母は、非常に悲しんで終に病氣になつて死ぬことがよくある。又子をとられた母猿が、樹に縛られて居る子を見て、自分の頬を打つて憐みを乞ふたが、殺されたので、母猿が悲んで自ら擲ちて死にたいといふ話もある。大水で夜中に子犬が箱ごめ流れさうなのを、母犬が家の戸を足でがりがりいはして、家人を起し、助けを呼んだのもある。それと似た話は、先年東京地方に海嘯があつた時、葛西村字中割の梅原寅寅（當時三十九）といふは、家が波に倒された時、一兒を荒縄で脊負ひ、他の二兒を兩腋に抱へて、濁浪の爲に北へ北へと流されて行つたが、途中で力が盡きて、右手の子を波に浚はれんとしたので、その子の結髪を口で咬へ、手で流れる材木などを排しつゝ、千葉方面の海岸に打上げられた。口に咬へた子は命を取り留めたが、脊の子は死んで居た。寅寅は子を脊負つて居た所の外、全身に傷を受け、子を咬へた齒は全部緩んで、咀嚼に堪へぬやうになつたといふ事が、當時或

雑誌に出て居た。母親となると、獸類でも人間でもこんなものである。獸類の父は子には案外冷淡で、母が哺乳させて、子を守つて居る時でも、呑気に出歩いて、一向顧みもしないものがある（人の父にもあるが）。猫属の如きは、母が子を愛して、父に疎いため、母の注意を父に向けさす爲に、父が子を殺すこともあるので、母は子を隠すことがよくある。哺乳動物では雌は妊娠、哺乳等の重荷を背負ふから、雌は雄に従へられ、雄は暴君、雌は奴隷となり、又一夫多妻となる傾向がある。それだけ雌には犠牲心が強くなり、子の爲に配慮し、勞苦することを、却つて無上の特權とし、喜びとするに至ることもある。

五

人間の母に至つては、下等動物に於ける母親の幼稚園から、漸次進級して、母親の大學に入つたやうなものである。即ち人の母はあらゆる動物の母の絶頂であり、

冠である。他の動物の母は、人の母を地上に出現せしむべき階段である。如何に人の母が、妊娠、哺乳、育児を通じて、子の爲に盡すかは云ふも愚かなほどである。自分はこの事を拙著「胎教」及び「母と子」に於て、種々の實例を挙げ、又これを文學に求めて稍々詳しく述べた。その事だけを書いても二冊の書物になつたほどであるから、とてもここにこれを盡くすことはできない。人の子は未成熟期が長く、獨立するまでには二十餘年もかゝるので、それまでには動物は多くは老年となり、又は風くに死んで居る。それだけに人の母の配慮苦勞も大で、とても他の動物の母の比ではない。特に幼時は殆んど母の手一つで育つので、一二歳の子は勿論、小學校に行くやうになつても、何かにつけて、「お母様」と二言目には呼んで居る。女には子供の時から母性が潜んで居るので、女の兒は幼兒をいたはり、可愛がり、人形にまでもかしく。さうして生殖可能の年頃になると、異性を憧憬すると共に、子をほしがらるやうになる。自然からいへば、男は子を産ます方便で、目的は子

であるから、子のない中は、女は第一に夫を愛するが、子が出来ると、子を第一に愛し、夫は第二次的、附加的のものとなることがよくある。それほど、婦人には子が氣に入るもので、子ほどの合性はないのである。「はらみ子喜びて我腹の中に跳れり」とある如く、妊娠の喜びは、始めて母となる者の、比較を絶つた喜びであつて、創造者のみの感じ得る喜びであり、大自然の喜びであり、天地と共に喜ぶのである。それから出産となれば、「一人の嬰兒われらのために生れたり」で、その高き産聲は自然の揚げたる凱歌である、生れた子に初めて面と向つた時の歡喜に恍惚たる母の有様は、天上の光景ともいふべきもので、宗教畫の最も高尚なる畫題の一つとして、古來取り扱はれて來たほどである。哺乳もまた母の心を樂ましむるもので、星のやうな腫で母を見上げつゝ、小さい手で乳房をいぢられながら、柔い紅の唇で、乳を吸はれる感じは、哺乳する母ならではの經驗するを得ざる悅樂である。しかし又一方では妊娠中の不便、出産の苦痛、哺乳育兒の苦勞もあるが、母はそれしき

の事に屈託するものではない。子が世話をやかせばやかすほど、子の犠牲となればなるほど、子に對する愛情は燃え盛り、眞の婦人はその間に作り上げられるので、母となつて、婦人は卒業するのである。

以上述べ來つた所によれば、女子は生理的のみならず、心理的にも母となるべきものであつて、是が女子の採るべき最も正常な自然の道であることが理解されるであらう。「そらの鳥を見よ。彼等は雛を養ふにあらずや。野の獸を見よ。かれらは子を生むにあらずや。水中の魚を見よ。かれらも亦然らずや」とは、子なき婦人の嘆聲ではないか。「慶たし惠まるゝ者よ。爾は女の中にて福なるものなり」とは、子をもてる婦人を祝福する言葉である。

婦人は子があるので、張り合ひがつき、苦勞をも苦勞とせず、勇んで働くことができる。子は女の合藥で、生けるラヂウムである。持藥にもつてこれほど利くものはない。動物でも子は母に智慧を與へ、母を賢くするのであるが、人に於ては一層

さうであつて、母は子を育てる必要に迫られて、種々の工夫を凝らし、思慮を廻らすことになる。實際これほど生きた教育はないので、子供は母の大先生といつてもよい。幼児は母を快活にし、若がへらし、健康にし、新鮮にし、オリヂナルにする。それで教育を受けない婦人でも、母となつた人は、どこかに練れたところがあつて、高等の學校教育にも代へられないものを。經驗上もつて居る。従つて「彼女は母たり」との一言を聞けば、その婦人には、或程度の値打をつけてよいのである。「彼女は嘗て美人であつたといふ事の外、何もない婦人は氣の毒なものである」。ゲテは「久遠の女性が我等を向上せしむ」と言つた。その女性は母として全盛に咲くのである。女子は子供の時より潜める母である。女子はこの潜める母性を發揮して、母の榮光に居るを欲しないのであるか。

六

こんな事を言はないでも、生存慾と並んで生殖慾は最も強いものであつて、子が欲しいのは、ベンギンの情であると共に人間の情であるから、婦人も結婚して、成るなといつても、母になるに違ひないと言ふ人もあるかも知れぬが、實際は必ずしもさうでなく、婦人で獨身の人があり、増す分でも減らないやうである。婦人が獨身であるのは、凡そ次の理由から來るものと考へられる。

(一) 主義から來た獨身 主義にも色々あるが、純潔といふ考から來るのも、その一つである。人は純潔の生活をするのが理想で、異性に接してはけがれるから、生涯童貞であるべきであるとして、尼さんなどになる。キリスト教の舊教の僧侶の如きこれである。それならば人間が皆この理想の生活を實行したならば、人間が絶えはせぬかと反問すると、イヤその時は神様が性交しないでも、子の出來る方法を授けて下さると、澄まして居る人もある。それでは人間がまた下等の生物のやうに、無性生殖をする事になるので、逆行である。西洋では中世に偉い人が僧侶になつて獨

身生活をし、子孫を残さなかつたのは、優秀の血統を絶やしたので、人類の損失であつたといつて居る人もある。女の聖者といはれるやうな人も偉かつたに違ひないが、獨身で子孫を残さなかつたのはをしい事である。又哲學上の厭世主義から、人生は考へ能ふ最悪の生活だから、生を否定して、人類を滅亡せしむるが、理想であるといふので、獨身を主張し、實行するものもある。これは哲學者だけに女よりは男に多い。優生學からいへば、これらの優良なる人の種こそ繼續したいのに、残念な事である。

(二)活動の都合から来る獨身 自分が事業をするには、配偶者や子があつては面倒で、それに精力を奪はれるから、一人暮らしをするのである。男子では學者や志士によくそんなのがあり、軍人や實業家にもある。婦人でも學問で立つ人、教育、博愛、矯風などの事に身を捧げる人には、よくそれがある。しかし(一)の、主義や哲學から獨身で居る人は女には少く、西洋の女よりは日本の女には尙少いが、(二)の方は

そろそろ日本にもありだした。外國語の出来る人で、ミス何某と呼ばれ、西洋に行つた事があるか、西洋婦人と交際の多い婦人などによくある。尤も今の若い婦人には主義とか活動とかの名にあてがれて、一寸えらさうに聞こえ、新らしげに見えるので、獨身で暮らすなどと云つて居る者もあるが、多くは永續させず、いつの間にか丸鬚などに結つて居るのはめでたい事だ。

(三)生活の都合から来る獨身 自分が一人子であるとか、兄弟は多くても皆女で、自分が長女であるとか、末の小さい子が一人男であるとかして、自分が親始め一家を扶養していかねばならぬといふやうな婦人が、よく獨身生活をする。これは多くは已むを得ずの獨身で、感心ではあるが氣の毒な人である。親も氣の毒がり、本人も時々悲觀することもある。かういふ婦人は元來獨身主義の人でないから、親が亡くなつたり、弟妹の始末がつくと、晩婚する人もある。又可なりの俸給を貰つて、自由な生活をして居る婦人が、結婚すると其自由を奪はれ、俸給まで棒に振るのはを

しいといふので、躊躇して居る内に婚期を失して、自己を獨身婦人と、いつの間にか見出すのもある。又美貌を鼻にかけて、夫の選り好みをして居る中に、敵が寄つて仕まふのも、稀にはあるだらう。しかしこんなのは、選られに来る男子が多すぎて、取残される氣遣ひはまづはない。美貌の代りに財産を以てする場合も亦同じい。(四)己を得ずの獨身 別に主義も理想も哲學もない、結婚したい一方でありながら、遂に獨身といふ婦人である。財産が無いか少いかで貰ひ手のないのもそれで、これは西洋に多い。生活難がはげしいからである。日本では随分手ぶらでも嫁ける。その代り離婚も多い。器量が優れない爲に、残されることもあるが、女にすりなしで、これは極めて稀れである。この外生れつき結婚出来ない身體をもつた婦人もある。又女子の過剰な國では獨身婦人が多い。殊に西洋では此度の歐洲大戰で壯丁が澤山死んだから、益々婦人が餘り、先づ結婚できぬものと思つて居なければならぬほどである。それでも醫術が進んで居るから、随分ひどい畸形や片輪になつ

ても生き残つた廢兵があるので、かゝる人に看護 旁 結婚する有志の婦人もある。かういふのは威心の人もある。歐洲に獨身婦人の多いのは、主としてこの婦人過剰が生活難の爲である。結婚したいのは山々であるが、その爲に出来ない誠氣の毒な人々である。我國では結婚しようと思へば大概できるので、又殆んど結婚して居るのは實にめでたい事で、これが最終の日本の強みといつても可からう。といふのは獨身婦人は兎角ヒステリックになるので、ヒステリックの婦人は實に始末にいけない。一家に斯る婦人が居ると、家庭の平和を亂し、一家をこはす。それには一人で澤山、二人までは入らない。社會に斯る婦人の多いことは、社會を神經衰弱に陥れ、病的にし、之を破壊する。それ故家を破り、國を亡ぼすには、斯る婦人を殖やすに限る。歐米は目下その手續を入念に履んで居るので、どんなに國が富んでも、一國の根本資源の婦人がかうなつて來ては心細いものである。日本は心丈夫に思ふがよい。何も太平洋會議などにビクビクすることはない。西洋はこんな所で強

がつて居ても、案外の所から、内から弱つて来る。こゝをしつかり握つて、女は殆んど皆結婚して、生理的又心理的に最も自然な満足な生活を、婦人に營ますがよい。これが國是の第一である。それには我が國の家庭の改善が必要である。今日のやうな義理と人情の矛盾の多い家庭を改善して、義理と人情が調和するものとしなければならぬ。

(五) 變態から来る獨身 性的に無感覺で、異性の意味の分らぬ婦人、男子の嫌ひな婦人、子供の嫌ひな婦人、かゝる婦人は獨身で通すことがある。變態だから仕方がない。それを普通の若い婦人が、新らしがつて、眞似しようとする者のあるのは、心得違ひである。變態心理の所有者たる病的の作家が書いたものなどを讀んで、これに私淑し、眞感にもないのにあるらしく、自分は男が嫌ひだとか、子供がいやだとか、雑誌などに吹聴して、得意がる女文士らしい者が時々あるのは、苦々しい事だ。もし本統にさうならば、それは變態の人で、正常の婦人ではないのだから、隠

れて居る方がよい、何も自分のアブノーマルな事を吹聴するには及ばない。並みの女ならば、男子が好きで、子供が好きで、早く結婚して子をもちたいものなのである。又變態には中性的婦人といふものもある。男か女かよく分らず、音聲舉動なども女といふよりは男に近い方である。可なり濃い髭などを生やしてゐて、男のやうな顔をして居る。これも例外だから論なし。

先づ婦人が獨身である理由は、大體上に列擧したやうなものであらう。其大多數は氣の毒な方で、決して當人の本意ではない、中には崇高な動機から獨身の婦人もあり、人類の恩人といはれるやうな人もあるが、それは萬に一つもない例外で、一般婦人の手本とすることはできない。かゝる感動すべき、又感謝すべき獨身の婦人でも、生理の法則は見逃してはくれないので、やはり獨身生活の及ぼす心身の不利益は受けて居るのである。人事に例外はあるが、天則に例外はない。要するに婦人は年頃に結婚し、母とならねばならぬのである。

四 結婚の倫理的解釋

男女が相愛する原因に就ては、神話や宗教などにも種々の説明がしてある。その中でプラトンは、その對話篇の一なる「シンポジウム」一名「饗宴」の中に、斯様に云つて居る。元來人間と云ふものは胸が真圓くて、四本の腕と四本の足があり、圓い首の上に同じやうな顔が二つあつて、顔の間に頭が一つあり、耳が四つあつた。それで却々強くて、諸神に對して、異圖を有し、神々の手にも合はなかつたから、神の王なるデュピターが人の力を弱める爲に、その身體を半分に切つた。さうして二本の手を持ち、二本の足で歩くやうにしたのである。さうすると半分にされ

た片方は他の片方を求めて已まず、遂に餓えて弱つて兩方が死んでしまつた。それでデュピターが可哀相に思つて、その兩方を合せてやることにした。その兩方の接合に由つて、人類が繁殖するやうになつた。その分けられた一方は即ち男子であり、一方は女子である。その時から男女相互の愛と云ふものが起つて、各々の半分は他の半分を求めて已まない。一方は常に他方に憧憬れ、一方の靈は他の方から或るものを得やうと渴望して居る。その渴望の充たされるのは、兩方が接合して一緒になる事である。斯う云ふやうにプラトンは、男女相愛の起原を説いて居るが、兎に角實際男だけ、又は女だけでは、何となく物足らないので、一方は他を得なければ満足しないのである。今日の言葉で云へば性慾とその満足とである。近松も「日本振袖始」に「神の鳥居の二柱一人は立たぬ教へとや」と云つて居るが、人間は唯男子だけでも成立たぬし、亦女子だけでもいけない。詰り兩方が有つて始めて完全なる生活が出来るのである。プラトンの説明の當否は兎に角、理窟の前に事實はこ

れを實行して居るので、野蠻未開の人類に於ても矢張り男女間の愛はある。その結果種々の出来事が起つたので、人間の歴史はつまり愛の歴史である。

二

結婚は男女の間に成立つものである。その結婚の歴史方法などについては、ウエステルマークの「婚姻の歴史」(法學士藤井宇平氏譯「婚姻進化論」)は、可なり多くの事實を擧げて説いて居るが、大體から云へば結婚の原始的なものは、今日のやうな男女個々の意志による結婚ではなくて、男子が腕力や武力を以て、女子を掠奪又は強制して自分の妻としたのである。それであるから、結婚後も男子が權力を専らにして、女子は唯財産の如く取扱はれ、生殺は男子の意志のまゝであり、人に與へようと思へば、與へもしたのである。又財産或は勞力を提供して、女を親から買つて妻とすることもあつた。これも女は財産視せられて、夫の私有物となり、全く其

意志に由つてどうにでもせられたのである。甚しいのは妻を家畜の一種と見做して居たものもあり、今日でも野蠻人にはさう云ふのがある。野蠻未開時代には、一般に男子は戦争と狩獵を事とし、女子は家事を營んで居たので、男子は體力歩力に於て優者であるから、女子は奴隸の如く取扱はれて來た。文明が進んで來ても、人民が武を以て立つて居る時は、常に男子が權力を専らにして、婦人は唯男子の道具の如くなつて居たのである。これに就てスペンサーは、其「社會學」に於て次の如く云つて居る。最下等の人類に於ては、女子は男子の爲に虐待され、最早それ以上虐待されては、女子が生きて行き、又子を産むことが出来ない限界迄、虐待されたものである。武を重んずる人民に於ては、常に女子は低く見られ、酷い取扱を受けて、さうして多妻が行はれた。ところが産業が發達して來るに従つて、女子の地位は高められ、又一夫一婦が行はれるやうになつて來た。即ち偏武生活に一夫多妻、産業生活には一夫一婦が伴ふものである。是は單に未開の人類ばかりでな

く、昔の羅馬に於ても、男子は總べて軍人であつて、女子は専ら家事をやつた居つた時代には、最大の軍國主義が行はれたのであつて、夫は妻に對して絶対の權を有し、生殺意の儘であつた。政治上の専制主義と家庭の専制主義とは相伴ふものであつて、政治上男子が武斷を以て専制を行つて居る時代に於ては、家庭に於ても亦夫は妻に對して、全權を有つて居たのである。其武斷主義の權化とも云ふべきナポレオンは、「夫はその妻の行爲に對して絶対の支配を有せざるべからず」と言つて居る。此武斷主義の例は、日本に於ても之を見ることが出来る。日本は長き内亂の後、全く武の國となり、政治上の自由なるものは知られなかつた。従つて家庭に於ても自由といふものなく、妻は買はれ、妾は置かれ、又夫の任意に妻は離縁され、又妻が姦淫した場合には、其首を斬ることも夫の勝手であつた。ところが日本も、近年産業が發達するに従つて、女子の地位は進められ、夫は最早以前の如き權利を、妻の姦淫に對しても有つことが出来なくなつたと。(スペインサー「社會學原理」第一卷)

第十章

以上はスペインサーの説であるが、明治維新以來我が國は西洋の文物を取入れて、權利義務の思想も入つて來、又産業なども大分盛んになつて來たから、昔の如き絶対の權利を、妻に對して夫が有することはないが、やはり軍國で通うて來て、偏武的傾向を有つて居るから、昔ながらの男尊女卑は依然今日迄も行はれて居る。唯昔とは女子の地位が比較的高まり、其結果權利も大分認められるやうになつただけである。支那も日本と同様である。否日本よりは一層女子の地位が卑い。一體東洋は男尊女卑であるが、是は詰り女子の無力から來たものである。既に支那では「人生婦人の身となる莫れ、百年の苦樂他人に由る」と、白樂天も云つて居るが、東洋では、女子はその夫次第のものであつて、自分の力でどうすることも出来ない。女の運命ははかないものである。今日でもなほ或程度迄は、日本でもこの詩の通りである。女子が唯男子の道具と見られて居つた時には、實に女子は哀れなものであつた。

獨逸でも昔は市に貴賓が見えたと、其歓迎の意味で、市の娼樓を開放して、賓客の選ぶが儘に、婦人を供したと云ふ事である。我國でも徳川時代の遊廊は、今日の俱樂部のやうなものであつた。身賣と云ふことは今日でもあるので、やはり婦人を財産の如く見て、取引をして居る者もある。

三

斯様な状態に於て、對手の自由が認められずに成立つ結婚は、高い意味に於て結婚と云ふことは出來ない。娶るといふ字は男が女を取ること、昔の結婚の何たりしかを示すのである。それは唯男子が女子を貰つて、自分のものとしただけのことである。西洋に於ても、なほ女子の人格が十分に認められないで、結婚が男女對等ではなく、結婚後其權利に大なる差のあることに就て、随分異論を唱へて居る者もあるが、日本はこの點に於て西洋よりも一層甚しいのである。一體眞の結婚なるもの

は、當事者たる男女相互の人格が認められなければならない。人格を認めず、自由のない所に、眞の結婚は成立たない。一方の人格が認められず、自由がなくして成立つた結婚は、眞に結婚と云ふ事は出來ない。男が女を取るだけの事である。人格が認められ自由が豫想せられ、而して其上に結婚に必要なものは愛情である。愛情のない結婚は結婚の本旨を没却するものである。今日の所謂結婚なるものは、法律と慣習に依つて成立つたもので、結婚式を擧げて披露し、又結婚届を役所に出したのが、結婚といふのである。併し是は唯形式上のことであつて、必しも實質的に結婚したとは云へない。結婚は對手の人格自由を認め、男女相互の間に愛情の存在することを、第一の要件としなければならぬ。ビクトル、ユーゴーが、所謂結婚なるものは、多數の場合に於て實は姦淫である。所謂姦淫なるものは却つて眞の結婚であると云つて居るのは、言の矯激に失する嫌はあるが、結婚は愛を本としなければならぬと言ふことを、力説したものである。今日の所謂結婚なるもの

は、唯法律上その手續を済まし、儀式を擧げて社會に認められると云ふだけの、形式的のものである。唯其形式を履んだものを結婚と云ひ、配偶者特に女子の人格、自由、愛情如何の顧みられないものが、滔々として行はれて居る。今後の結婚は實質の改善されたものでなくてはならない。役所に届出るとか、儀式を擧げるとか云ふことは、この實質に附屬する第二次的のものである。併ながら社會生活をする以上は、社會の風習や法の規定を無視すると云ふことは、宜しくないことであるから、實質と形式と相伴ふやうに、兩方を改善せねばならぬ。それが進歩せる今後の結婚であると思ふ。唯男の氣に入つたから、その女を貰ふなどと云ふことは、實は結婚でも何でもない。尤も昔でも女子が自分の意志の自由を主張したことが稀にないではない。「君に添はるか五千石取るか、何の五千石君にそふ」と云ふ如きは、五千石の歴々の武士を振捨てても、自分の愛する、地位も財産もない男に連添ふと云ふ女の意志を發表したものである。また近松の「薩摩歌」の娘おまんは、「子は親次第

のものなれど、縁の道ばかりは押付けわざにはならぬこと」と云つて居る。「思ひ思はれ添ふのが縁よ親のそはすは縁じやない」といふのも、子が我儘で、親を無視したといふ非難は免れないが、結婚のエッセンスを率直に言表はしたものでないか。是等は結婚は愛を本とし、當事者の意志を尊重せねばならぬと云ふことを現はすもので、現代の結婚は大分これを尊重することゝなつて來た。結婚は男女相互の自由意志の合致と、愛情が主とならねばならぬのである。

又女の人格を認め、之を男子と對等に置かなければならぬといふことは、理論上今日は認められる所であるが、實際は女子の實力がこれに伴はなければ、その實現はむづかしいことである。言換ふれば、女子の經濟狀態が進んで、獨立の能力が出來なければならぬ。即ち女子が實力を以て、自分の權利を主張し、實行することが出来なければ、どんなに理論が唱へられても、その實現は困難である。それで女子教育は女子の能率を進め、自活能力を養ふことを、女子の人格を認め、又男子と

對等に置く爲にも必要として、今日唱へて居る譯である。さうすれば、百年の苦樂他人に由ると云つて、唯男子に寄り縋り、泣付いて、どんな無理無體をされても、置いて貰ふやうなことはなくなる。女子が無力で男子に寄生して居る以上は、結婚状態は依然として今日のまゝに存在するであらう。女子の人格が認められ、其意志が尊重せられると云ふことは、獨り結婚に限らず、總ての男女に關する問題の、解決の根本として要求されねばならぬことである。

四

西洋では結婚は愛情を本とするのであるから、愛情が無くなつて、同棲する事が無意義になつたならば、離婚しても可い。即ち結婚は必ずしも生涯續くものでなくとも宜い。一時的の結婚と云ふものも。此後は隨分行はれるやうになるであらうと言つて居る者もある。カール・ペリアソン、エドワード・カーペンターの如きは、こ

れである。愛情以外の動機から結婚した男女が、面白からぬ月日を送り、甚しきは仇敵の思をして、同じ家庭で生涯生活を共にする如きは、詰らない事であるから、愛情の續く限り同様しやうと云ふ者が出来ることも、有り得ることであらう。それは西洋には現にあるのである。是は離縁とは少しく違ふので、初から合意の上で分れることもあるであらうと云ふことを豫想して、結婚するのである。通例の離縁と云ふのは、生涯連添ふ積りであつたのが、案外の故障に出合つて、計らずも別になる事である。離縁に就ても種々研究されて居るが、ルイズ・ポストと云ふ人は、「結婚と離婚との倫理的原理」と云ふ書物に於て、結婚は愛情に由らねばならぬので、儀式や法律上の手續は第二次のものである。従つて愛情が配偶者に無くなつたならば、離婚することは妨がない。愛情に由る自然の結婚は、愛情の消失に由る自然の離婚に終り得るものであるといつて居る。要するに自分の知る限りに於ては、多くの結婚論者は、今日結婚が法律上の手續や社會の慣習に重きを置き過ぎて、結婚の

實質たる愛情を軽く見て居ることを遺憾に思ひ、將來の結婚は其反對に、愛情が主となり、方便的のことは唯それに伴ふ一層軽い事と、ならねばならぬと云ふ事に於て、大體一致して居るやうである。カ・ペーアソンは、結婚も離婚も當事者の任意のことで、誰もこれに干渉することは出来ない。併し第三者である子供が出来た場合には、國家はそれに干渉しなければならない。離婚するにしても、子供の始末に就いて無責任なことは許さない。第三者を有せざる夫婦二人ぎりの場合には、一生進歩はなければならぬと云ふ理由は必ずしもない。二人の間の私の事であるから、相互に於て決定すべきものであると言つて居る。要するに今日の結婚は形式に重きを置いて、肝心の實質を案外輕視する傾向があるのであるが、我が國の結婚の如きは殊にそれが著しいやうである。

五

一般の男子が權力を専らにして、女子は唯その道具の如く見做され、或は女子が單に男子に寄生して居るやうな状態に於ては、一夫多妻が行はれるものである。昔から今日迄野蠻人に於ても、所謂文明人に於てもそれを證明する事實は澤山ある。一體男子は革新的で變化を好み、女子は保守的で與へられたものを守る傾がある。従つて男子は本來の性質として多くの女子を要求し、女子は一人の男子を守る傾向がある。又男子は精力が強く發動的であるから、女子よりも性慾が強く、性的満足も多く要求するものである。従つて男子は元來多妻的傾向を有するものである。それに以て來て權力が伴へば多妻を要求するのは、その自然の傾と云つても宜からう。それでル・テールの如きは、男子の性慾より來る墮落を防ぐ爲に、早く結婚することを勧めた。併し早婚は必ずしも男子の貞操を完ふせしむる所以ではない。實際買淫する男子は未婚の者ばかりでなく、可なり既婚者が多いとは能く言はれることである。従つて早婚せしめたところで、男子の貞操が必ずしも完うせられるもので

もない。又早婚は必ずしも愛を完ふするものでもない。西洋で離婚と云ふことは、舊教は認めず、新教から起つたものであると云ふことにも意味がある。併し多妻の状態は女子の地位低く、無力なることを表はすもので、その地位が高まり、能力がつくに從つて、一夫一婦に向ふのである。「結婚と遺傳」の著者ニスベットは次のやうに云つて居る。多妻の國に於ては、各々の女は家庭と主人を見付けることが出来る。併し多妻は女の哀れむべき状態を來すものである。例へばマホメット教の國に於ては、十年間に二十乃至三十人の女子を娶れる男子を、見ることは普通であり、又女子も若くして一ダース以上の男子の妻に、次々になる事は珍らしくない。さうして唯男子に食はして貰つて、毎日湯に入つて喋つて居るに過ぎない。斯う云ふ状態に於ては、女子の進歩を見る譯がない。斯様な女子を妻として、代々の國民が生まれ、養成せられた人民の間に、如何なる知的進歩を認めることが出来るであらうか。歐洲の文明は、一夫一婦の制度の蔭である。一夫一婦は相互の愛情を強から

しめ、有ゆる藝術を生み、男女の選擇及び遺傳の作用に由つて、優良なる子孫を生じ、又文明の産物をこれに傳へて、能く教育することが出来ると言つて居る。

それで婦人が唯男子の快樂の道具となり、其人格は無視され、唯家畜の如く養はれて居るやうな國に於ては、高い文明の起る譯がない。女子の人格が認められ、自由が尊重せられ、教育が施されてこそ、始めて高い文明は生れて來るのである。此點に於て我國に於ても、尙社會及び家に於ける女子の地位、夫妻の關係等に、改善すべきものが多々あると思ふのである。デヨージ・パローは「より高き愛」と云ふ一篇の論文の中に、次の如く云つて居る。身體と精神とは分つべからざるものである。肉は靈に反對のものと思はる事は出來ない。肉と靈とは相互の助に由つて、調和的に發達すべきものである。それで男子と女子との身體的接合は、同時に男子と女子の磁流の混合である。昔の人は愛を主として肉體的に見た。從つて文學にも高い愛を謳つたものはない。然るに近代の愛は精神的になつて來て、近代の詩

人の謳つて居る愛の詩には、昔の詩人に見るべからざる微妙な感じを述べて居るものがある。その愛には普通の人間の以上、靈的愛とも云ふべきものがあつて、其の詩の文句には、常人には感ぜられないやうな、神的な愛の交流が通つて居る。我々はこれをシエレー、スキンバイン、ブラウニング夫人、キーツ、ユーゴー等の詩に於て窺ふことができると言つて居る。

エドワード・カーペンターも「愛の行はるゝ世」なる著書に於て、同じ意見を述べて居る。曰く、男女が相愛する事に由つて、茲に言はば人格の合金とも云ふべきものが出来、其精神、感情の交感に由つて、互が高められる。即ち男子は女子を要し、女子は男子を要するのである。この意味に於て結婚は一層價値あるものとなる。それには結婚が唯形式的に行はれるのではなく、配偶選擇の自由があり、愛情がなくてはならぬ。完全なる男女の合一は、その條件として完全なる自由を有せねばならぬ。眞の結婚は婚約しない。婚約は賣約濟と云つたやうなもので、人を餘儀な

するものであると。カーペンター・ニューマンも男子は必ず女子を持たねばならぬと云つて居る。言換れば女子は必ず男子を持たねばならぬと云ふ事である。ところが一夫多妻となると、其間に眞の愛が成立たず、一方は唯他の道具として生きて居るのであるから、此尊重すべき男女相互の精神的交感がむづかしく、相互を一層完全なる状態に持來することが出来ない。即ち男女の理想的生活を営まうとするのには、一夫一婦でなければならぬ。

獨身はその點に於て大體不利益である。男でも女でも完全な人の片破れとも云ふべきものであるから、獨身で完全なる生活をするに云ふことは困難なことである。又生理的に言つても獨身には無理があつて不自然である。獨身の女子にはヒステリイが多い。又ダーウインやガルトンは、中世に於て偉い人が僧侶となつて獨身生活をした爲に、其の子孫の絶えた事は人類の大損失であると言つて居る。それで偉い人は結婚して、なる可く其種を残すことが望ましい。今日でも獨身の婦人が随分

ある。中には貧乏の爲に結婚の出来ぬのもあるが、又高等の教育を受け主義の爲に結婚をしないのもある。後者の如きは何方かと言へば素質の優良な女子である。それが獨身で子を生まないと云ふことは、人類の損失であるから、素質の良い、さうして高い教育を受けた婦人こそ、子を生まんでくれなければ困る譯である。然し實際は高等教育を受けると、獨身の傾向が多くなる。結婚しても晩婚となつて、生む子の数が少くなる。これは男子に就ても同じことで、こゝに高等教育が早婚かといふチレンマがあるのである。

六

以上は主として結婚に関する理論的考察であるが、こゝになほ今後に起る實際の大問題がある。それは今度の歐洲大戦争から起る問題である。この戦争のためには殊に歐洲の交戦國は多數の結婚年齢の男子を失つた。英國の如きは、戦前女子が男

子よりも百二十萬超過して居た。その時でも女子の四分の一は始めから結婚の出来ぬ見込がないと言はれて居たが、この戦争で澤山男子を失つたとなると、一層結婚率は少くなる譯である。その他獨逸でも佛蘭西でも、女子の方が多くなつて、結婚の出来ぬものが澤山になるに違ひない。國家としては相當の人口を有して居なければ、その發展の上に不都合であるから、この失はれたる人口を回復しようとするれば、成る可く多く女が出生してくれなければならぬ。それで或は一夫多妻と云ふやうなことが行はれ、又國家もそれを公認すると云ふやうになりはすまいかと言つて居る者もある。現に三十年戦争の後には、それが實現されたと云ふことである。又私生兒を生んでも、國のために出かしたと譽められないまでも、今日までの如く恥づべきこととされず、又子は國家が受取つて養つてくれるかも知らぬ。

それで戦後には男女關係は非常に難しい問題となつて来る。戦後には戦争中示した婦人の功績と實力に由つて、その社會的地位は一層高められ、權利は一層多く認

められ、又能力も進んで来るから、唯自分の生活を男子に託すると云ふ意味で結婚する者が、一層少くなるであらう。自分の好きな結婚よりも、自由戀愛に赴く女子も多くなるであらう。さうすると社會の慣習や、役所の届出に由つて、正式に結婚したもの認められるとか、認められないとか云ふことは、大した問題とならずに、結婚は私事として、實質的に男女各々その好む配偶者を選んで、愛情の續く間、同様すると云ふやうなことが、一層行はれるやうになりはすまいか。如何に女子が性的要求を有するにしても、自己の人格を蹂躪せられ、自由を妨げられて、未開時代の一夫多妻に墮し、又はマホメット教國に於けるが如く、閨房に多勢の他の女と同棲するやうな、自分を棄てた多妻主義に甘んずるやうな事はすまいから、自然自由結婚と云ふものが多くなつて来るであらう。さうすると今日普通に行はれて居るやうに、結婚は約束であつて生涯連れ添はねばならぬと云ふ考が、餘程薄らいで來はしないであらうか。勿論男女相愛し氣もよく合つて、男女相互が良き意味に

於て異性的感化を十分に受けつゝ、生涯連れ添つてその人格を完全する事が、理想の結婚として望ましいけれども、皆が皆さう云譯には往かないで、詰り自由結婚、或は一時結婚と云ふものが、今日より多くなりはすまいかと思ふ。是は今日の世間的道德觀から見れば、又奮憤に捉はれた人から見れば、非常に不都合な事と考へられるであらうが、實際になつて見れば、少くも西洋ではそれが是認されるかも知れない。しかし日本のやうに歴史的に家族主義で、家族制度を重んじて居る國では、實に不都合のことと見える譯である。

七

我國に於ても今後家族主義といふものは何う云ふ風になるだらうか。昔の家族と今日の家族は餘程様子が變つて來た。昔は多く一つの地に土着して、親子兄弟夫婦皆同一の所、或は同一の家に住んで生涯を送つたものであるが、今日は外國に行つ

て居る者もあり、或は住地を異にして、親子兄弟が東西南北離散して生活をして居るものが随分多い。それは國家の發展、自己の發展上已むを得ぬ事情であり、又祝すべきことでもある。兎に角昔のやうに家族が同一の家に住つて、生涯を終ると云ふ事は今後益々出来なくなるから、昔の家族と今後の家族と云ふものは、餘程その状態が變つて來る。従つて家族と云ふ意味も變つて、近い血族の精神的團結と云ふことになつて、その肉體は方々に離散して居り、唯その本を忘れないと云ふやうな事になるであらう。しかし日本のやうに、縦に親子が家族を成すのでなく、西洋のやうに横に夫婦が家族を成すこととなれば、夫婦はどこへでも共に行つて、肉體的にも家族は一所に生活することができる。親と子が一所に移住でもして、妻だけ一人家に残るといふことは不自然であるが、親が故郷に残り、夫妻が他地方に一所に出て生活することは自然である。従つて我が國の如き親子本位の家族が、今後の我が國の發展に果して有利であるか否かは疑問である。今日の我が家族主義は封建時代

には適當で、有利であつたであらうが、生活や活動の様式の變つて來た今日以後に於ても、これが最も良いものであらうか。既に因襲的家族主義と我が民法とはその精神や實際に於て矛盾があり、民法は餘程西洋流の夫婦本位が採入れられて居る。現に宮中の御儀式や御招待には親と子でなく、夫婦が召されるといふことも、この西洋流の夫婦本位である。詰り日本の所謂家族主義なるものも、時代の進歩と國家の發展につれて、何とか適應するやうに變化すべきものはであるまいか。

古は家族だけで何でもやるといふ風であつたが、今日の家族は又必ずしも文明生活に適した力を十分に備へて居ない。教育にしても、衛生にしても、國家社會の干渉助力を俟ち、又それを受けた方が宜いこともあるから、唯家族が一つの完全なるものとして存することが出来ずに、家族よりも一層大きな國家とか社會とか云ふものを待つて、始めて一つの完全體となつたならば、今日の完全體としての家族と、その新しい家族とは餘程意味が違つたものになるであらう。従つて日本の

家族制度と云ふものが、今後の文明生活に由り、又戦後の西洋の男女關係の變化等の影響に由つて、何う云ふ風に變つて往くか、又是に處して如何になすべきかと云ふやうな事は、十分に考へねばならぬ問題であらうと思ふ。日本では家族主義と云ふものが、唯歴史的にあつたから、今後もその儘あらねばならぬといふ丈で、今後の文明生活が如何に之に影響するであらうか、又如何にこれに適應しなくてはならぬか、と云ふやうなことに就ては、十分考へられて居ない。これは國家の爲にも喜ばしいことではないから、家族主義に就ての研究も大いになさねばならぬ。ただ傳説を墨守すると云ふことは、永久の策ではないから、如何にこれを改善すべきか、又これを保存すべきかと云ふことは、尙ほ十分に考へねばならぬことと思ふのである。

五 義理と人情

一

世の中には義理と人情の衝突の爲に苦しむ人が随分多く、種々の悲劇のこれから生まれることも珍らしくない。小説や演劇なども、これを取扱つたものが多い。一體その様に義理と人情とは衝突すべきものであらうか。

それに就いて先づ考へねばならぬのは、義理といひ、人情といふのは何を意味するかである。共によく使ふ言葉であるが、通例誰もはつきりした考はもつて居ないやうである。しかし凡そ次のやうに解したらば、どうであらうか。

義理といふのは、或時代或社會に行はれて居る道徳が、義務として實行を命ずる

ことである。然るに道徳は時代に由つて變遷し、又社會に由つて相違のあり得るものである。例へば封建時代には、武士が試し斬りする事は、別に罪惡とは考へられず居なかつたやうであるが、今日は誰でもこれを是認する者はない。又昔ギリシヤでは奴隸を置き、學者でもこれを許して居るが、今日はどの文明國でも奴隸を認めず所はない。それで道徳は必ずしも古今東西同一なるものではなく、部分的には彼此相違し、矛盾した所もあるものである。

ところが人情といふものは、人間自然の感情から出るものであつて、人類共通であり、世界的であり、古今を貫いて同じものである。即ち義理には日本の或時代の人民の義理といふものが有り得るが、人情は何の時代何の國の人情といふものはなく、唯人情である。人情の生命は人類の生命と同じであり、その範圍は過現未の正常の人間の範圍と同じである、否人類を溯つて動物にさへも行はれて居るものもある。義理は人爲のものであり、人情は自然である、しかし義理にも人情を土臺と

したものもあり、人情を離れて作られたものもある。義理と人情が合した場合には生活は順風に帆を揚げるやうに、調子よく行くが、それが衝突した場合に、種々の悲劇が生まれるのである。

戀愛は全人類の情であつて、成熟期に達すれば、正常の人には皆自ら起るものである。それで文學や劇で、一人の處女の戀愛の過程を取扱つても、我々が興味を感じ、又は同情を起すといふのは、其取扱はれた唯一人の處女の出來事ではなく、時間空間を通じて、あらゆる處女の、又は少くも斯るタイプの處女の代表者として共通性を有するからである。或一人の處女のハートのときめきは、あらゆる處女のものである。それ故作家は一人の處女を活躍さす爲に、ローマ帝國の滅亡を背景とすることもある。ローマ帝國は如何に偉大なものであつても、一時の、又世界の一部に限られたものであるから、滅亡もしたし、又全然忘れられることもあり、今でも知らない人は澤山ある。

しかし或一人の處女のハートのときめきは、すべての處女のそれであるから、永世的であり、世界的であつて、その生命はローマ帝國の生命よりも遙に永く、その範圍はローマ帝國よりも遙に廣いのである。我々が「クオ、ヴァデス」のカーリーナに同情し、「ポンペイの最後の日」の盲目の娘ニチアに同情するのもそれが爲である。ルソーの懺悔録は唯ルソー一人のものでなく、また萬人のそれである所に意義があるのである。

戀愛に限らず、人情といふものはさうしたものである。ところが前に述べたやうに、義理は必ずしも人情と合しない。そこに人間の苦惱がある。稽へて見るに、日本人の従來の義理といふものは、不自然で人情に反したものが、随分多くはなかつたであらうか。

二

一體昔の道徳は、寧ろ外から與へられた所の道徳であつて、内心から出たものでない、客觀的であつて主觀的でない、獨斷的であつて批判的でない、他動的であつて自動的でない。特に封建時代の道徳は、階級的であつて、少數の権力者に都合の好いやうな、方便的のものであつた。斯る時代の道徳が人爲的で、人情を輕視し、又は無視したものに成り易いのは言ふまでもない。而して我國の舊道徳にも可なりそれがあつたやうである。従つて義理と人情の衝突が多かつたし、今もその犠牲になつて居る者が少くあるまい。

男子にもあるが、特に婦人は封建時代の武力本位、男子專制の下には、その都合の爲に作り出された道徳に由つて、どれほど人情を殺して、義理に殉じた事であらう。而してその餘波が今日に及んで、婦人の泣かねばならぬ事は、随分あるやうである。餘波どころではない、封建時代そのまゝが、まだ全國に随分行はれては居ないだらうか。明治維新以來文明の進歩著しきものがあるが、それは特に物質的文

明の方で、精神的方面は舊來の陋習のそのまゝ、残つて居るものが少くない。雲助の駕籠が汽車と變り、飛脚が電信電話に、早馬か飛行機に變つた程の變化は、精神的文明にはないので、不相變の丁髷を心頭に載けて居る。それ故道德風習が案外改善せられず、人情と昔風の義理の衝突は却つて多くなり、一層の慘狀を演出するの觀がある。

この舊來の義理の中、不道理と思はるゝものに對して、劇しき攻撃を加へて、人情を防護し、その權利を力強く主張した人は、故福澤（諭吉）氏であつた。

福澤氏は新日本の開拓者の一人であつて、卓抜なる見識を以て、常に時代に率先して國民を指導し、大膽率直にその所見を筆にせられた。特に婦人の爲には女大學評論及び新女大學の二論文を公にして、舊來の女性に對する道德的要求の、不合理なるものあることを痛撃せられた、この二論文は今日に既にクラシツクとなつて、英國のミルの「女子服従論」と、その意義に於て東西對立すべき傑作であると

思ふ。

その中女大學評論は貝原益軒の女大學を評論したもので、益軒の女大學を女子の舊道德觀の代表者としてこれを批評攻撃し、新女大學はその後を受けて、福澤氏自己の意見を發表したもので、共に今日の婦人の必讀すべきものである。二論文の主旨は、要するに從來の婦人道德なるものには、餘りにも無理で、人情に反すること甚しきものあることを指摘し、成るべく義理なるものが、人情の自然に合するやうにならねばならぬ事を力説したのである。

例へば、女子が結婚して離縁せられる理由に七つある。所謂七去の教であるが、その一つは、子なき女は去るべし、尤も妾に子あらば去るに及ばずといふのである。その理由は、妻を娶るは子孫相續の爲だからである。これに就て福澤氏は、子の無いのは、男の方か女の方か分らない。偶然に再縁して子を産む女もあり、幾人の妾を置きながら、遂に一子なき男もある。「子なきが故に離縁といへば、家に婿養

子して配偶の娘が子を産まぬとき、子なき男は去るべしとて、養子を追出さねばならぬ譯なり。「子なき女は去ると云ふ、實に謂はれもなき口實なり」と言つて居られる。

又婦人は夫の家を我家とするから、嫁を歸るといふ。即ち一度嫁しては、其の家を出ざるを女の道とすと、昔は決定して居た。それ故、行つた先で如何に虐待されても、實家に歸れず、居るに居られず、遂に嫁入の時持つて行つた九寸五分で、目害するやうな事があつた。「盆が來たらば實家へいつて命の洗濯して來たい」といふのは、多くの嫁の心の願で、上の部といつても可からう。或は舅姑を本統の親よりも親愛尊敬して、一層孝行せよと云つた所で、福澤氏をして言はしむれば「是れが人間の天性に於て行はれることか、行はれぬことか、篤と勘考す可き所なり。實際に出來ぬことを勧め、行はれぬことを強ふるは、元々無理なる註文にして、其の無理は遂に人をして偽を行はしむるに至る可しである。

三

こんな工合で、日本の従來行はれた所謂義理なるものには、人間の天性に反し、無理なる註文が少くなかつたと思ふのである。而してその義理は、時代道德の命令なるが故に、力強く人を強ゆる。人情はまた大自然の後援を以て迫るから、もしこの両方が衝突する場合には、其何れに従ふべきか、當人は非常に煩悶苦惱せざるを得ないのである。「およそ世間にせつないものはほれた三字に義理の二字」といふのもこれである。情歌には義理と人情の衝突の悩みを、歌つたものが多い。特に我國の舊劇の如きは、殆んどすべてがそれと言つてもよい。その義理には方便的、不自然の甚しきものがあつて、人情を壓迫し、せつば詰つて自殺するといふやうなものが多い。

かゝる義理には残忍冷酷で、これでもかこれでもかかと云ふやうに、手を變へ品を

換へて、人情を虐待するものもあつて、如何に演劇とはいへ、餘りに無理残酷なと、観て居て劇的興味を生ずるよりも、腹が立つやうなのがある。見物人も泣く前に考へて見るがいゝ。義太夫などにも、わざわざ無理なことを拵へておいて、その結果に泣かさうと仕組んだものが多い。人物にも自己を偽つて、義理の名に於て、心にあらぬやうな事を口走る二重人格者が少くない。観たり聴たりして居る中に、あれが本心であらうか、もしさうならば、それは人間ではない、變態心理の所有者か、モンスターだと思はれることがある。それ程我國の舊道德の命ずる義理の中には、人情に反せる不自然のものがあるのである。

西洋の道德は、我國のそれよりも人情に近く、方便的人爲的の所が少くて、人の天性に基いた所が多い。従つて義理と人情の衝突が少く、道德が人情に成るべく衝突しないやうに出来て居る。それで家庭生活や戀愛から來る悲劇が、我國より少いと思ふのである。心中などは西洋には殆んどないと云つていゝ、心中は人情が義理

に殺されたのである。「思ふた男と添はしておくれわしがこの世は五十年」の如き哀訴は、日本の女の方が、西洋の女よりは多いと思ふ。

それならば生活は人情一點張り、義理は少しも顧慮する必要はないかといふに、決してさうでない。人情は人間の自然から出づるものであるが、自然から出づるものは、すべてが善いとはいへない。性善説は倫理學上にも異論のある説で、これに對する性惡説もある。しかしこれらは共に極端の説で、眞理はその中間にある。即ち人性は善惡の兩要素の混合せるものであると思ふ。人間の耳だけ見て居ると、やはり人間も動物だと言つた人もあるが、耳だけ見て居ないでも、人間には動物性がある。しかしそれが皆劣等な譯ではない。動物性にも優秀な性質がある。その代りまた獐猛、残酷、無理解といふやうな性質もある。人情といつても、激情とになると、悪い意味に於ける動物性に墮落することがある。「女房もちとてほれまいものか女房去らせてわしがなる」などと言つて、妻子のある男を横取りした場合に、

よくやつた、流石人情に忠實な婦人だといつて褒められやうか。其時には義理を知れといひたくなる。其反對に「亭主もちとて」といつて、男が夫子のある婦人を横取りしたりすれば、人間がまた禽獸に後戻りしたので、交尾期に於ける犬猫と選ぶ所がなくなるだらう。人間の天性といつた所で皆善良なものではない。これを指導し、或は助長し、或は抑制し、洗練して、良き意味に於て人間らしくせねばならぬのである。

六 同別か別居か

人の子は動物中最も長く親の保護教養を受けるものである。犬猫の如きは、生れて數日すればヨチ／＼歩き出し、數週の後には自分で食物をあさつて生活する。鳥の如きも、雛の巢立ちは早いもので、おきに獨立するが、獨り人の子は歩くまでも、生れて少くも一年位はかゝるし、身體の成熟には凡二十年を要し、教育を卒へて獨立生活を營み得るには、それ以上を要する。それまでは所謂親の脛かぢりである。それで親が幼兒を放棄すれば、子は育たぬから、親は子から離れることが出来ない。又子といふ共同利害のために親夫婦も離れることが出来ない。かくて兩親と子が、少くも子の世話の入る間は、一所に生活せねばならぬ。そこで家庭といふものが出來たのである。三界の首枷なる子が家庭を人に作らしむるセメントである。

禽獸では子が早く獨立して、おきか家庭から出奔する。それで家庭を作る間もして、直ちに瓦解し、雌雄親子別れ別れになつて、終生血縁の親しみを味ふこともできず、老いても孤獨のたれ死をする。人間に於ては、少くも親の世話の入る間は、両親と子は三位一體として一所に生活して、家庭生活を営まねばならぬ。これが最も自然的な生活の方法で、恩愛の絆も人情の美もこの間に養はれるのである。それで親子は同居を可とするか、又は別居を可とするかは、子がまだ親の保護教養を受けて居る間は、問題にはならぬので、無論同居が可い。一般的には同居に限るといはねばならぬ。それで同居か別居かとの問題は、親が存在し、子が成人して妻をも娶り、獨立生活を営むやうになつた後に起ること、これはなかなか大切な問題である。

子が獨立しても、まだ妻を娶らぬ間は、親子水入らずで、人情の自然と子の成人の喜びとで、一家は圓滿、何等の風波も起らず、家庭は先づは樂園である。ところ

がこゝに嫁を迎へるとなると、此水入らずの親子の間に、突然他人が闖入して来て、横合から多年手しほにかけた大事の子の愛を、奪はうとするやうに見える。子も妻を愛せぬ譯にはいかない。それ丈親に對する愛が薄らぐやうに見える。しかし實際多くの場合薄らぐものではない。一定量の子の愛を妻が分取するのでなく、迎妻は子の愛の増加である。従前通りの親への愛プラス異性の愛である。それを嫁が親への愛を横取りしたと推測する親が少くない。親子の愛と異性の愛とは別物なるに氣付かず、一所にしてしまつて、筋違ひに愛の敵として嫁を喜ばぬやうになり、嫁が子に水をさして、親子仲を疎隔するかの如くさへひがむのである。かくて嫁を貰つてから、家庭がおもしろく行かなくなり、風波が絶えぬといふのが、世間によくある。

殊に女子は子を産み生み、哺乳養育するもので、身體的に生殖に與ることが男子よりも遙に大である。従つて女子は己れ自らその任務に與らんとして、同性を性的

に排斥する本能的傾向をもつて居る。愛に關する女性の競争は嫉妬である。従つて、母として天與の任務を全うした後までも、他の女が同じ任務を遂行せんとすることを、情力的に嫉妬するのである。舅は意識的に又は無意識的に嫁なる若い異性の與ふチャームを感じ、嫁を眺めて喜び、親切に仕へてくれるを尙喜び、又過去に多くの女と交際した多少の飽満（その交際し方の深淺程度には色々あらうが、男子は女子よりも一層交際が自由であり、又男子の貞操のやかましくいはれぬ日本では女子には接近し易い）は、性的に割合に解放されて居るから、子が嫁を貰つても、姑ほどに一大事として嫉妬を感じないのである。嫁を妬むといふことは、女子の自然的傾向であつて、物の分りの良い、何事にも發明な婦人でも、この一事には盲目であつて、あの賢婦人がどうしてこれが分らぬかと不思議なほどである。（中には分つた人もあるが、先づ例外である）。それで「末永くいびる杯姑さし」とか「氣に入れば氣に入つたとて氣に入らず」とか、姑のこの心理状態を穿つた川柳は昔

からなかなか多いのである。

それでも舅姑が共に揃つて居れば、姑は自分にも夫があるのだから、まだ寛和されるが、姑が早く夫を失つたり、且艱難辛苦して子を育てあげた婦人で、もと一層嫁を妬む情が強いもので、嫁には一番困難なものである。それで母一人子一人といふ所へ嫁した者は、案外簡單で氣樂のやうであるが、實はなかなかつらいものである、（勿論例外はあるが）。

性的嫉妬は姑が嫁を快く思はない先天的原因であるが、その外後天的原因も色々ある。女子の教育低く、趣味乏しく、境遇の狭いことは、細い道を二人並んで歩くやうなもので、姑嫁の衝突を多からしめ、又姑の注意を嫁の一身に集注せしめ、その缺陷を苛察的に探し求めて、一層氣に入らぬ者とする。又實際嫁にも種々の缺陷がある。殊に今の嫁は主張のみ強くして、義務の念弱く、快樂を追ふに急にして、困苦に堪へる力に乏しい。加ふるに非常識、無遠慮、無作法を以てする

こともある。これでは姑に氣に入る筈はない。兎角古い者は損で、若い美しい者には同情が寄せられ易いから、姑嫁の不和には、咎は姑にあるやうに世間はいふが、嫁の良くない場合も案外多いのである。

一般に我が國人は獨立心弱く、特に年寄となると子に寄頼るものと極めて居るか、舅姑は固より嫁の奉仕を期待して居る。それで嫁は子が貰つたのやら、親が貰つたのやら分らぬやうなのがある。子には氣に入つて居るが、親の氣に入らぬから、離縁するといふ悲劇も随分ある。それで家庭では嫁はなるべく舅姑に接近し、夫にはよそよそしくして居らねば、舅姑殊に姑の氣に入らない。新婦は新夫に外形上最も他人であらねばならぬ。こんな不自然な、不本意な無慙なことがあらうか。かくて人生の甘かるべき時期を針の筵に坐するが如く、容赦氣がねの有りたけをして過ごさねばならぬのである。蜜月なるものは、我が國では多くは、唯字書に存する空名である。

我が國では家族主義の名の下に、古來どれだけ若い婦人が、沈黙無告の下に苦しみ悩んだであらうか。どれだけ面白くない月日が家庭の中で送られたであらうか。どれだけ多くの家庭が悲劇の實演場であつたであらうか。嫁の時に悩んだ結果はヒステリーとなり、ヒステリーの姑となつて、又嫁を悩まして、順次にヒステリーの婦人をどれだけ多く作り出したであらうか。凡そヒステリーの女位仕末にいかぬものはない。ヒステリーは矛盾の化身である。家庭に一人のヒステリーの女あることは、家庭の破壊を意味する。勝海舟は國家の大事よりも、家庭の些事の方が多く心を勞するものであると言つたが、その家庭の些事に悩ます源は、ヒステリーの女が第一等である。

家庭は自然の人情で温められ、固められたものでなくては、眞に春風駘蕩の樂園となることは出来ない。舅姑と嫁との間には人為の不自然がある。自然の親子の如き感情が、中年から人為的に生ずるものであらうか。里子にやつた實の子さへ、

親子の情は並よりは薄いといふではないか。その點に於て古來東洋の教は、其文を美にして、人情の自然に反し、實行不可能の事を強いて、随分虚偽に生活せしめたものではあるまいか。

それで自分は今後は一般的には、親子の別居を實行する事にしたいと思ふのである。即ち親は若い時から、子の世話にならないでも生活できるやうに、物質的に用意し、子が妻を迎へたならば両親は別になるが可い。しかしこれは親の方から進んで行ふべきことで、子から要求すべきではない。氣が利いた親ならば自分の方から別居するのである。別居されても、子は親に對する責任が解除されたのではないから、物質的扶養なり助力なりを努め、又精神的慰安を十分になさねばならない。一施して報を願はず、受けて恩を忘れず」といふ語があるが、親子關係もさうありたい。別居といつても、必ずしも遠方に離れるに及ばない、隣でも近所でもよい、否その方が可い位である、唯一家の中に居らぬまでである。又封建時代の、土着して

家祿を世襲して居る場合はいざ知らず、活動の範圍廣く、職業のある所に住居する今日は、新夫婦のみが任地に行つて、両親は郷里に残ることも少くないから、別居せざるを得ない事もある。かゝる場合には同居か別居かの問題は始めから無いので、一般に今後は生活及び活動の必要上、別居的傾向は益々強くなるであらう。同居説はその時代の趨勢に逆行するもので、國家社會の發展を阻むものではあるまいか。その意衷は嘉すべきも、これを實行するに至つては、前述せる如き種々の不利を生じて、折角の意衷に反するの結果を生ずることもあらう。

但し両親が獨立に堪へないか、片親であるか、特に母親のみである場合には同居すべきであらう。それでもし出來れば家族が自分の室をそれぞれ有つて居て、雑居せぬ方が宜しい。嫁も朝から晩まで見通されて居れば、缺點も見られ、氣まづくもなる。それで食事の時、用事の時、晚餐後など一家族總出で話し遊び、餘の時間は多くは自分の室に居ることによりたい。その方が家庭が秩序立ち、締りもよく、仕事

もでき、且睦じくも行く。今日の如き雑居は廢めたいものである。

一家に老人のあるのは、種々良い事もある。老人の存在は家庭に品位あらしめ、家庭を嚴肅ならしめ、着實ならしめ、兒孫をして曾父母に對する暖き經驗を得しむる。しかし差引勘定やはり別居が可いと思ふのである。別居してもかゝる好影響を受けられぬではない。

老ては友人も少くなり、生ひ先も短いから、子は親を大切にし、親切を盡くし、心丈夫に感じ、慰安を得て生活するやう、子は努めねばならぬ。これは同居たると別居たるとを問はないのである。

七 兩性と社會

一

性の起源と申しますと、随分面倒になります。下等な生物は實際的には性がなくて、男性とも女性とも言へない。單細胞のものが分裂して、子孫を造つて行くのであります。併し單細胞の生物の中でも、所謂接合生殖と云ふことになりますと、見たところ同じ單細胞の二個體が接合して、さうして其核の實質を互に混合して、又新に生活力を得て、分裂を始めて子孫を作るものがある。是が先づ性の初めであります。併しその接合する二個體は、まだどちらも男性とも女性とも別らぬので、顯微鏡で見ても同じやうなものであります。所が追々生物が進んで參りますと、男

性と女性が外形上にも分る程著しくなる。例へば魚でいへば、鱈の如きは、女性が川の砂利に畝のやうなものを造つて、それに卵を置きますと、男性の鱈が其卵を見たと云ふと、何となく引附けられてそれに魚精を發射する。水中に於て受精するので、まだ兩性の愛と云ふものが其所にない。相手を見るのでなしに、卵が置いてある。その卵に引かれるのであつて、高等の動物に於けるやうな意味の愛と云ふものはないのであります。更にイモリなどになると、兩性で形が既に變つて、男性のイモリには、脊に鰭のやうなものがあり、尾の形も違ひます。さうして一定の季節には、異性が居ると、何となくそれに近づくと云ふやうな傾がある。是はフィジカル、フオンドネスと言つて、まだ心理的の愛着でなしに、身體的にすぎなので、何となく雄が雌の所へ行つて機嫌をとり、雌の氣に入らうとする傾があります。之になると雌雄と云ふものは、唯生殖機關のみならず、外形に於ても、既に違ひを認めるのであります。

斯様にして高等動物になる程、男性女性の外形が變つて來、又内部も心理狀態も違つて來まして、遂に人間に至つて其絶頂に達するのであります。初めには唯兩性の相互の牽引は、皮膚即ち觸覺の作用でありますが、昆蟲や鳥などになると、男性が生殖の時季には、音樂を奏して又は歌つて、女性を樂しませ、又自己の所在を知らして相近付くことになりませうから、形も一層違ひ、男性には羽があつて女性には羽がなかつたりする。螢の如きは相互に光を交換し、雌が留まつて居つて、その所在を光で知らすと、雄は飛んで此所に居ると、光で合圖をして、相互が見付かつて、近付くと云ふやうなことをして居る。又エメリの伊太利の螢についての觀察によると、その光り方は、男性と女性で違ふので、男性の螢の光は短くて合間も短いが、女性の光は一層長くて合間も長く、又光が震へて居ると云ふ。さうなると雌皮膚の接觸ばかりでなく、音であるとか、光であるとか、さう云ふものが兩性を引付ける所の方便となつて來る。更に眼を多く使ふやうになると、鳥の如き、男性

の鳥には、羽の色の立派なもの、或は鳥冠の綺麗なものがあつて、色彩が著しくなり、形も大きくなります。又雄の獅子には鬣があるとか、雄の鹿には角があるとかいふ工合に、男性には裝飾をして居るものもあります。斯様にして大體に於て動物が高等になる程、兩性の身體的相違が著しくなつて來て、遂に人間の兩性に至つて、それが最も著しくなつたのであります。即ち自然は其努力の一つとして、動物が高等になる程益々兩性の相違を著しくしやうとした様に見えるのであります。従つて今後の文明の進歩と云ふものは、生物學的に言へば兩性を似寄つたものとするよりも、寧ろ益々違つたものにし、さうして引付ける力を強くすることではないかと思ふのであります。

倫理や政治や經濟の方からも、生活上の要求はありますが、生活の無上命令は生物學の法則であると思ふ。我々が家庭に生活し、社會に生活するにしても、常に生物學の教を無上命令として我々は受け取つて、然る後に倫理問題など色々な問題を

解決すべきではないかと思ふ。一般に今日婦人問題を説く人は生物學的知識がどうも十分でない、今少し婦人論者は生物學上の研究をする必要があると思ふ。今申したやうに、大體に於て生物は高等になる程、兩性の相違が著しくなつて來るのであります。我々はその自然の大勢に従ひ、兩性の特色を發揮するやうに努めなければならぬと考へるのであります。

二

身體と精神とは互に離すべからざる關係を有つて居るものである。従つて身體が違へば精神も違ふのは當然であります。男女の身體の相違は色々ありますが、其相違を生ずる有力なる原因は、生殖腺の分泌する所謂ホルモン（内分泌物）であります。是が成熟期になると作用を選しうして、男は益々男性的の身體、女性は女性的の身體を造り上げるやうになつて來るのであります。それで支那や土耳其の宦官の

如く、男の子供が去勢されますと、男性的の發達をせずに成長して、大人になつても、婦人の如き聲を爲し、骨格もかほそくて、筋肉も弱く、脂肪が多いと言つたやうな、變性男子を生ずるのであります。又女子に於て卵巢を取除いたりしますと、女性的の特色がなくなつて、男性に近いものになります。又年をとつて生殖機能がなくなる時、時には女に口髭が生へたり、聲が男性的になつたり、顔の相が男のやうになつたりします。即ち生殖腺の内分泌物の作用が不十分であると、女子は眞に身體が女性的にならず、男子も男性的にならぬ。又作用が減退すると、男性が女に近づき、女性が男性に近づく傾がある。老人の兩性が近くなつて來るのも、其爲であります。斯様に男女は身體上の相違があれば、同時に精神上にも相違があるのであつて、女性の心は一般に受動的であり、デリケートで感情が強い、而して直覺力が優れて、適應性が強いのであります。男子の心はどちらかと言へば、批評的分解的であつて、而して獨創的である。考へも大がかりであつて容易に決定しない、根

本的にやると云ふ傾がある。推理にしても婦人はどちらかと言へば歸納的である。男子は演繹的であります。斯様に兩性の心は身體が違つて居ると同じやうに、やはり違ふのでありまして、女性の智と男性の智と云ふものには、自ら特色があり、働き方も同様でないのであります。それが相待ち相補ふので、好いのであります。夫妻にしても、各の智慧の働き方が違つて、各特長がある。どんなに學者であつても、経験家であつても、時には妻の女性的の智慧が大に役に立つことがある。斯様に男女と云ふものは、互に相補ふものでありますから、それを同じ標準に依つて、一つのものにして仕まふと云ふことは、自然に反する事であり、逆轉と申しても宜しからう。即ち身體に於きましても、男性は益々男性的に發達せしめ、女性は女性的に發達せしめなければならぬのであります。然るに今日は唯一の標準を男性に置いて、さうして男女共に男性的の標準に依らうとしつゝあることは、間違つたことだと思ふ。男性の標準は唯一のものでありませぬ、女性には女性の標準があり

ますから、各々の標準を目あてとして進むべきであります。尤も男女には共通性もあつて、男女は同じ人間である以上、種の違つた猿と犬との違ひのやうなものではない。兩性の違ひはあつても、動物學者は同じホモ、サビエンス、即ち人類に入れば、生物學的の相同が最も多い同種類のものでありますから、共通性は勿論あります。その共通性はヒーマニチー、即ち人道に屬するもので、人道を以て兩性を統一すれば宜いのであります。今日は人道問題と男子問題と女子問題と三つあるものであります。第一の人道と云ふ名に依つて、男女と區別すべき問題をも一つのものにしようとするのは、間違ひであります。共通の人道問題は共通に論じ、共通に取扱ふが宜しい。しかし男子問題と女子問題とに區別すべきものは、明確に區別して行かなければならぬのであります。

歐羅巴の大戦に於て婦人が男子の仕事を執つた。今日は殆ど以前男子がして居たのを、婦人がやつて居ります。是は實に婦人の能力を實際に證明するものであります。しかし婦人が男子の執つて居た仕事に今日従事して居ると云ふのは、急場の場合であつて、女子に適當であるか、不適當であるかと云ふことを論ずる暇がなかつたのである。兎に角男子がやつて居れぬから、婦人より他にする者はない、其所で婦人が従事したのであります。故に婦人の性質に適しないものでも、背に腹はかへられぬ、一時婦人にやつて貰つたものもありませんから、追々と歲月が経つに従つて、婦人が天性に適つた職業の選擇を致して、不適當であるものは止めて、是迄しなかつたものでも女子に適當であるならば、引繼いで今後もやるやうにする。是から職業の整理と云ふことに、は入らなければならぬのであります。今日女子はこれまで男子のやつた職業を執つて居るから、是が是認されたものと思ふのは間違つたことであつて、今日はまだ渾沌たる創業時代でありますから、是から適不適の區別をして、さうして不適當のものは段々廢めて、元のやうに男子が取つて代るが好いのであります。婦人の身體及び精神上無理なことをさして居ると、その報ひは次の

時代に來るのであります。生産の不能、或は弱い子を生むとか、澤山生まぬとか云ふやうなことになつて現はれますから、その損害と云ふものは、婦人が少々の仕事を工場などでやつてくれるよりも、人類や國家に取つて大なるものであります。斯う云ふやうな譯であるから、婦人の職業は、西洋の婦人がやつて居るからと言つて、直ちに日本の婦人もやると云ふ事は、餘程考へなければならぬのであります。

三

男女兩性と云ふものは普通に考へて居るよりも餘程意義の深く廣いものであつて、兩性の原理を宇宙の原理とする人もある。原子の構造に付ても、ポラリチー（極）と云ふ考へを、物理學は入れて居る。そのポラリチーの物理的のものから、生物學的のものになつて、その絶頂に居るのが即ち男女のポラリチー、人間に於ける陰性と陽性ではないかと考へるのであります。原子を構成せるエレクトロンの陽電荷、

陰電荷と云ふのは、最も原始的なるポラリチーであつて、それから一番發展したものが人類に於けるポラリチー。これは自然が謂はゞ長いことかゝつて非常な努力の後に造り出したものであります。兎に角ポラリチーと云ふものは、宇宙に廣く行はるゝ原理であつて、單り男女の兩性のみならず、物理的化學的作用に於てもこれを認めるのであります。従つて男性女性の相引くと云ふことは、即ち宇宙の原理からスタートして居るものと考へると、非常に力の強いものであります。

併ながら男性女性と云つても、實際の者は純粹のものではないのであります。どの男性でも女性の生んだものであるから、その身體には女性的要素を含んで居り、又兩性に由つて出來た女性にも男性的要素は含まれて居るのであります。ただ男性では男性的要素が一層多く存在し、女性には女性的要素が一層多く存在して居るのであります。故に男性は男性的要素を發揮し、女性は女性的要素を發揮せねばならぬ。女性に於ける男性を發達せしめ、男性に於ける女性を發達せると、所謂變な

人間になるのであります。外形に於ても男が化粧して、腰を細くして、女性ともつかず、男性ともつかぬやうな人間があるし、一方では女性で軍人のやうな服装をして歩くやうな女子が、西洋にはある。是も現代の病的現象であると思ふのであります。ワインゲルと云ふ人は、純粹の男性をMとし、純粹の女性をWとして、而して、實際の男女はMとWが混合して出来て居るものと言つて居ります。それでAといふ人とBといふ人は、

$$A = \alpha M + \beta W$$

$$B = \alpha' M + \beta' W$$

である。その中、 α 、 β 、 α' 、 β' は各零より大で、一より小なのであります。これを男性とすると α 、 α' が β 、 β' より大であり、之を女性とすると β 、 β' の方が α より大であります。我々の男とか女とか言つて居るのは、實際的に言へば、純粹の男子でもなく、又純粹の女子でもない。男にも女が潜み、女にも男が潜んで居る

といふのであります。この考は正しい、實際さうであると思ひます。しかし個人には人道（H）、即ち共通性があるものとすれば、實際の人間は

$$A = H + \alpha M + \beta W$$

$$B = H + \alpha' M + \beta' W$$

の如き公式で表はした方が、一層事實によく相當しないかと考へます。それで男の方のHとMとWと、女の方のHとWとMとが合すると、こゝにヒューマン、ユニットが出来るので、男女の兩方が人の完成に必要な所以であります。其所で婦人はなるべく婦人らしく、Wの係數の β が一に近いやうなのが良く、男子はMの係數の α が一に近いのが良いのであります。即ち男子は男性的特色を心身に十分に發揮し、女子は女性的特色を同じく發揮して、さうして兩方が協同合致して出来た社會が、一番幸福な、又愉快な社會でありませう。然るに今日の文明は一方男子を女子にし、女子を男子にするやうな傾向もあつて、さうして變な第三性と云ふものが

出來つゝある。しかし斯う云ふ者は男女のどちらにも氣に入らぬものであります。本當の文明の進歩と云ふものは、男子は益々其男性を、女子は益々その女性を發揮して、さう云ふ人間に由つて社會を組織するにある。ところが今日の婦人論者には唯標準を男子に置いて、女子を男子のやうにしやうとする者があります。しかし眞理は、女子は女子の標準に向つて進み、男子は男子の標準に向つて進んで、さうして相互の牽引力が益々強くなりて、茲に完全圓滿なる男女の協同生活を營むるにあらるのであります。西洋は今日過渡時代にあつて、變態的現象も存するのであるから、それを決して吾々はそのまゝ眞似るべきはでない。

しかし今申した事は、決して女子の高等教育を否定するものではないのであります。女子が高等教育を受けることは、本人は勿論、家庭としても、國家としても望ましいことでもあります。今日の我國の家庭と云ふものは、原始的のものと餘り違はない、傳來的のものであります。今後の家庭は、高い教養のある婦人に由つて營ま

れるやうにならねばなりません。即ち新家庭主義と云ふものが出て來なければならぬと思ひます。昔のやうな、謂はば無我夢中の自覺のない婦人の造れる家庭でなしに、高い教養のある男女が、理解を持ち自覺をもつて造つた家庭が新家庭である。この新家庭と云ふのは、結婚當時の家庭を言ふのでなく、新しい意味に於ける家庭である。家庭は人類の始から存在する所のものであるが、今後の文明の家庭は、これに新しい内容を盛つた所の家庭であらねばならぬ。家庭と云ふものは、或論者のいふやうに、今後決して壊滅すべきものでなしに、改善してこれを造るべきである。若し女子が家庭を厭ふやうになれば、是は人類の呪ひであります。眞に婦人の爲に圖る婦人運動は、家庭を詛ふものではない。斯ういふ意味に於て、今後兩性共に高等の教育を各々其天性に従ひ、特色によつて受け、さうして相共に健全なる家庭を造り、女子は強健なる内容の充實した母となり、立派な子を生んで、幸福な家庭を營むと共に、一方に於てはかゝる家庭を單位として社會を造つて、さうして社

會生活を營んだならば、斯様な生活こそ實に理想に近きものであつて、吾々の努力は是より他にないと思ふのであります。

八 妊娠と出産

若い婦人が結婚して、初めて妊娠した時には、これまでとまるで變つた新しい生活に入り、新しい經驗をする事であるから、妊婦によりて種々の感想が浮ぶものと見えます。婦人は男子と違つて、子を生むものであるとは聞いてゐたし、母が子を生んだのを見た事はあるが、現在自分がその身にならうとは、殆ど思はなかつたのが、その境遇になつて見て、初めて自分も若き恵まれたる女であるといふ事を、自覺するに到るのです。

大概の若い婦人は、妊娠といふ事が初めて分ると、喜びと満足を感じるもので

す。同時に又一種の不安を感じ、出産の苦痛と危険とを豫想するものです。併し順當に行けば、妊娠は少しも不安であるべきものでなく、出産は恰も果物が熟して、蒂の落ちるやうなもので、自然の妙用で少しも危険のないものです。それも前の教へ方如何によるので、餘り母や他人から恐しいものゝやうに聞かされてゐると、自然假想的に恐れるやうになるが、學理上又實際上少しも心配すべきものでないと、能く言ひきかされてゐる婦人は、一向妊娠といふ事に就て、恐れることはなく、靜に心丈夫に、來るべき喜びの日を待つてゐるものです。

併し中には、初めて母となるのであるといふ事を知つた時、自分の生活がこれまでのやうに自由でなく、又華々しくなくなるのを悲しむものがないではありませぬ。それはアメリカの如き、娘が自由の生活をする國では多いので、日本の如き國では、かやうに悲しみを感ずる事は先づないと思ひます。つまり娘時分と母となつてからの自由の範圍が、餘り變らないからであります。又割に晩年になつて初めて

妊娠した婦人の中には、出産の苦痛と危険を想像するものもある事はあるのです。多くの夫は、初めて妻が妊娠したといふ事を聞くと、また種々の感想を懐くのです。自分の素質が良くて、日常生活が純潔である夫は、生れる子もきつと遺傳的に良いものであり又健康、強壯である事を豫想して、希望に勇むものであります。之に反して自分の遺傳が悪かつたり、日頃大酒を飲んだり、また不品行をしてゐた夫は、その報が生れる子に來はすまいかといふ事を憂へるやうになる。つまり夫は妻が妊娠と分つた時、初めて自分の從來の生活振なり行爲なりが、嚴正なる批判を受ける氣がするのです。又妻は妻で、初めて眞面目に夫の價値を審判する事となるのです。或妻は妊娠した時、わが夫は良くない者であるといふ事を、初めてはつきりと知り、かゝる夫の子は遺傳的に不具者と生れねばならぬと感じ、「夫としては私は彼を愛して居るつもりであるが、父としては又別の者と見た。この事を自分は妊娠前に考へたらよかつたが、何分結婚した時が十八であるから、考へが足らな

んだ」といつてゐる婦人もあります。中には、妊娠して初めて夫の病氣が氣になり出して、「自分が汚されてゐるから、子供も汚された者として生れるだらう。醫者は子は病氣の悪い結果を持つて生れるだらうが、私は却つて良くなるだらうと話した。私はいやな病氣を持つてゐる男子は、純潔な健康な婦人に、これを移す事によつて、自分の病氣を治さうと望んでゐる者がよくあると聞いたが、これは愛の正反對である。この位悪しく、又利己的な夫はない。なぜ前に醫者が私に注意してくれなかつたか、男子のかゝる行爲に向つて、天にも地にも復讐はないものか」と訴へてゐる婦人もあります。

又他の婦人は斯ういつて居ります。「私共は餘り年を取つてゐて、子供を設けるだけの精力がもはや無い。二人とも能くそれは知つてゐて、子供は出来ないと思つた所が、つひ出来てしまつた」と言つて、子供の出来たのを悔いてゐるものもあります。又或婦人は「自分は神経質であり、夫は一層さうである。これが多分二

人が氣の合つた基であらう。初は子供の事は考へなかつたが、妊娠して見ると、二人とも神経質では、生れる子は精神病者か白痴でなければよいがと、氣遣つた」と言つてゐる者もあります。又「私の夫は結婚前に道樂をしたから、子がどうであらうか」と氣遣つてゐる者もあります。

妊婦に就ては、昔から種々の信仰のあるもので、中にも、妊婦は一種の洞察力を有し、事物を眞實に、深刻に見抜く力を持つて居ると信ずる事は、民族の文野を問はず随分ある事でありませう。それで夫はこの普通より高い審判官の前に、直覺的に審問されるやうな氣がするのです。この時にやくざな男は、その嚴正なる審判にたぢろき、今後は身持を改めようといふやうな決心を起す事もあるのです。又妊娠すると妊婦を保護し、周圍の悪い影響から遠ざける爲に、別に産屋を造つて、そこに妊婦を置く事もあります。そして子が生れるまでは、そこに寂しく一人で住むので

妊娠に關する信仰、その取扱方等は世界各地方色々になつてゐるので、それだけ調べても中々おもしろく、材料も澤山あります。ドイツのプロッスといふ人類學者は、世界に互つて可なり詳しく之に就ての材料を集めてゐます。妊婦は又豫言者或は千里眼を持つてゐる者と信じられる事もあります。要するに妊婦は普通の婦人とは、身體的に違つてゐるのみならず、精神的にも特別の力を持つてゐるものと考へられる事があるのです。

二

妊娠すると、通例新しい生活の野が開かれ、殆ど別人の如くなる事があります。夫や上の子供や、社會的欲望などは第二次的のものとなり、専ら胎内の子に興味も注意も集中されます。生活の中心は胎兒です。それで随分高い教育を受け、音楽その他の藝能にも力を入れた婦人が、妊娠すると、文學も科學も繪畫も學習した總て

が實際無いものゝやうになり、又は虚榮の具の如く感ぜられ、一層心をひきつける芝居が、新しく展開されたやうに感じます。そして従来よりも別な、胎兒の保護育児等に關する知識が主に價値を有するものゝやうに覺え、これを長者の婦人から教へて貰ひ、或は醫者に聞き、本によりて學ぶのです。そして女學校時代の教育が、妊娠、出産、育児等に就て、不完全であつた事を歎ずる婦人が能くあるのです。尤も日本の婦人は、妊娠に就ても、ぼんやりしてゐて、高い教育を受けた西洋婦人ほどの自覺は、ないかも知れませんが、女學校を卒業した程の婦人には、多少さういふ感想は起る事と思ひます。妊娠の身體的不便、或は出産の不安といふ事も、大概は持つてゐるのですが、併しこれは一人の人の子を、この世に送るための奉仕であるといふ事を思つて、さほどそれを苦にせず、寧ろ苦痛の愉快といふ矛盾した一種の愉快を感ずるのです。

一體女子は男子よりも犠牲の念の強いものですが、妊婦となると、最もそれが強

くなるのです。苦しみの愉快といふものがあつて、妻でも餘り夫にやさしくばかりされてゐては物たらず、時にはひどく叱つて貰ひたい。砂糖ばかりではいけぬ、鹽もほしいと願ふものがよくあるので、それが嵩じると夫に虐待され、打たれ傷つけられて却つてそれを喜び、夫に對する愛情が燃えさかる事があります。何の因果でわしや此様にむごいお前に身をやつす」どうしてあんなに虐められても、別れずに、やはり夫の許にこびりついてゐるか、不思議に思はれる妻もあるが、妻となつて見れば、外から想像したやうなものでなく、ひどい目にあつて、ひいひい言つてゐる所に、一種の特別な愉快を感じることがあるのです。これは多少とも婦人にあける一種の心理ではないかと思ふのですが、これが妊婦となると、夫の子が夫に代るので、子に苦しめられる事が、子を一層つよく可愛がる原因ともなるのではないでせうか。それですから妊娠中の不便、苦痛、出産の惱みは、どんなひどい目にあはされても、生れた子をにくむ種とはならないで、反對に子供に對する愛情をつ

よめる事となる。これが自然の妙用で、さういふ事がなければ女子は妊娠を厭ふやうになり、人類は絶えねばならぬ。苦痛の喜びとか、苦痛を肥料とする愛とかいふ不思議なものが、天地間にあつて、これが女子、殊に妊婦及び母に於て最も力強く現はれるのはおもしろい事です。

妊婦が最初の胎動を感じた時には、又種々の感想を起すのです。子が我が肉體の戸を最初に叩いた時に、初めて母といふ自覺が起り、自己を人類の爲に捧げるといふ、新しき唯一独自の感情が湧いて來るのが普通です。胎動を感じぬ前は、まだ母心は臆氣であるが、胎動を感じるに到りて、母心が油然として起り、確かなる形を取るので、或妊婦は胎動によりて、胎兒の男の子か女の子かが知れるといひ、或妊婦は胎動の様子によつて、胎兒が工合がよいか、落着が悪いか、眠いのか、むづかつて居るかが分る、やうな氣がすると云つて居ます。又胎動が暫く止んだり減じたりすると、胎兒をきづかひ、或は弱いのではないかと思ひ、餘り子供が動く、

親が神経質になり、或は怒り、中には眠れぬ者もあります。自分が興奮すると、胎児も興奮するだらうと恐れる者もあり、又胎児は今遊んで居る、今は腹が減つて居る、或は眠いのだとか、怒つて居るとか、考へる妊婦もあります。

七人の子を生んだ或母は、いつも前以て生れる子の性を知つて居て、生れぬ先に名をつけたが、その二人は胎児との交感によつて、子の性質が分つたやうな氣がして、命名したのだといひます。中にはお腹の子を可愛がるやうにすると、お腹の中からそれを知つて、應答するやうに思つたと云つて居る者もあります。かゝる妊婦には、胎児は生れる迄もなく、最も實在的のものです。或妊婦は腹の子がよく動くので非常に早熟だと思ひ、早く産まうと思つたり、又胎児は早熟で身體が普通より小さいから、産も樂だらうと思つたりする者もあります。又生れぬ先に考へて名をつけた外に、胎児を呼ぶ可愛い名をつけ、その名を呼ぶと胎児がこれを聞きわけ、子と交感するやうなつもりで、話しかける者もあります。併し又中には、胎生學の

書物などを讀んでゐた爲に、繪などを見て居て、生れだちの子は見にくい者であらうと、想像したりする者もあります。

三

動物でも妊娠すると、本能的に生れる子の爲の用意をします。鳥でも卵を孵化させる爲には、葉や羽などの温かい物を巢に入れて、卵を温める用意をする。中には自分の胸毛を嘴でぬいて床を作つてやる鳥もある。併しそれは本能的にするので、十分にその意味を理解してゐない。ところが人間となると、母は生れぬ先から能く知つて居て、或は赤坊の産着を縫ひ、或は襦袢を整へたりします。人の母は下等動物からの母の練習を経てなつた者で、人の母となつて、母親の大學に入るのであるといつた人もあるが、妊娠してから母心が起り、未來の子の爲にいそしむ婦人の動作は、女子を眞の女子たらしむるものであつて、女子は一度は之を経験しない

と、本當の女になりにくいのです。妊婦となり母となつて見て、通例初めて女の花は咲き、眞の女になれるのです。それで妊婦がやがて生るべき子の爲に、何かと盡す事は、活きた自然の女學校に學ぶことであつて、他のいかなる女學校も之に當るだけの教育を施すことは出来ないのです。この胎内から母の懷へ、生理的養護から心理的配慮へ、胎内の血による養育から哺乳へ、肉の着物から織物の着物へ、自分を思ふ事から子供を思ふ事への移り行きは、發生心理學上の非常に複雑な、又あもしろい研究問題であります。この推移は或動物にもあるが、人間に於て最も意義の深いものであります。

出産の時の夫の始末に就ては、種々であります。或若い母は羞しく思つて、夫に外に出て行つて貰ふことを要求する。日本では能く友達の許などに行つて居る夫もある。又別室で一種の不安と希望とを持つて待つて居る者もある。中には生れる子は、妻と自分の共同の所有であるといふ權利を確保する爲に、夫も産褥につくとい

ふ奇習を有する野蠻人もあるといふ事です。併し大概は隣室かその次の室位で待つて居る夫が多いのです。西洋人などには、苦しいので妻が泣くと、夫も一緒に泣く者もある。中には、生れる時の苦しげな、しかも顔を、夫に見せまいと思つて、顔を被ひ、その間にも笑顔をして見せる者もあります。

夫に隣室にでも居て貰ふのは、自分が苦しむのは夫と子の爲であるといふのを、見て貰ふ念も、少しはあるのもあります。これが又夫の同情をひき、感謝の念を起さしめ、愛情を増すことにもなります。兎に角出産當時は、産婦の緊張は勿論であるが、夫も少からず緊張して居るには違ひありません。子が生れた瞬間から、相互の愛情、見方も自ら相違を生じ、子に由つて、夫妻の關係は益々密に、愛情は一層濃く、見方も一層高くなるのです。

子が生れて初めて之を見た時の母は、餘り子供が小さくて、赤くて、皺がよつたりして居るので、時には豫期を裏切られたやうな感じがする事もあります。併し通

例最初の産聲を聞くと、母も魅つたやうに感じ、恰も貧者の如意珠を得たるが如く其聲は音楽を聞くが如しです。或母は「私はその聲を聞いて、肺がいゝから大丈夫だと満足に思つた」といひ、或は「私は最初の泣聲をきいた時、先づ何も申分がないと思つて、感謝に溢るゝ心を以て祈る事が出来た」といひ、或は「私の會て聞いた最もスキートな聲であつて、私は喜びを以て恍惚としてゐた」といひ、或は「子に對して私の總ての義務を盡すやうにとの、私に向つての呼び聲であると感じた」といつて居る母もあります。

若き母の最初の又最も望ましい願ひの一つは、嬰兒が夫の腕に抱かれてゐるのを見る事です。昔はそれが夫の子である事を認める印ともなつてゐたのです。併し今は夫妻の結合の一層強くなれる印であり、又唯夫妻だけでなく、連帶の兩親である事をも意味します。恐らく夫が嬰兒を抱いて、妻と初めて瞳を見合はした瞬間ほど、神秘なそして意味深い瞬間はないかも知れません。こゝに二人はこの子の共同

の親であるといふ自覺を生じ、愛情と責任とは一層強くなり、初めて本當の人間となつたやうな氣がするでありませう。愛の喜びと嚴肅な氣分が同時に起つて、親ならでは感ずる事のできない、新しい貴い經驗を味ふ事ができるのです。

四

米國のスタンレー・ホールといふ有名なる心理學者は、多くの母親に向つて、この妊娠中の感想を書いて貰つて集つた物が百ほどあつた。その中の或ものを「教育問題」といふ著書に掲げて居ります。我が國ではまだ妊婦の感想を書いたものが少くて、餘り材料もないのであるから、参考の爲にその二三をこゝに掲げて見ませう。

(一)十七歳六ヶ月にて結婚、今二十三歳、二兒あり。妊娠してから私は、私が行けないのに、舞踏會や芝居や、其他の會に、自由に出る夫に對して機嫌が悪くなりました。私はどこかへ行つて隠れようかと思つた事もあります。私は

私の娘時分の事や、實家、花や鳥や、買物、唱歌、その他の事を考へました。子の事は少しも考へずに、私と一緒に泣いてくれた年寄の乳母を戀しく思ひ、私はあはれな犠牲者であると思ひました。また孤獨を感じ、おそく寝、おそく起き、終日何もせず、酸い物と甘い物を好み、わざと妙な物を好きなやうに装ひました。暗い所では寝られませんでした。自分の前から持つてゐた着物を嫌つて新しいのを調へました。私は娘の生れるを望み、大きくなつたらば美装させて、舞踏會へ連つて行つてやらうと思ひました。私は生れる子が美しくなくはあるまいかと氣遣ひました。よく夫と意見の衝突をしましたが、今は總てが順調であります。

これはアメリカの天地に生活し、アメリカの教育を受け、アメリカの風俗に育つた若い婦人の感じ、そしていひさうな事であります。

(二)二十八歳にて結婚、今三十歳、一兒あり。妊娠と知つた時は嬉しかつたが、

若しかの事はないかと氣づかひました。夫の神経質が絶えず私を惱まし、静養の爲に、夫から遠ざからねばならぬ事を、夫は十分理解してくれまいかと恐れました。私は以前よりは若やぎ、色目もよくなりました。私は父といふものを知らなかつたから、私も生れる子を、自分のものとしたいと思ひました。私は子の生れる前に名を與へ、衛生に注意して生活しようと思ひました。私の夫は自惚の強い人であると思ひました。生れた子供は父を愛しすぎる結果、母も餘り愛せぬやうになりはせぬかと心配もしました。私はピアニストで、結婚前にはピアノを教へて居りましたから、娘が生れたら、ピアノを教へてやらうと思ひました。夫は産期が近づいた時に、餘程わづらはされたと見えて、遂に病氣となりました。夫は愛しすぎる程私を愛してくれました。しかし夫の神経質は遺傳しはしないかと思つて、餘り夫を好まず、私でできるだけ用心して、餘り夫に頼りませんでした。

(三)二十五歳にて結婚、今三十四歳、五兒あり。子のあるのに誇りを感じ、特に後の子が生れたので、最も幸福を感じました。暮らし向は随分貧乏でしたが、勞力と配慮の加はるのを歓迎しました。最初の子は殆んど生れるとから、私には眞の實在であつて、最も愛しましたが、また生れればよいと思ひました。初の子は大きくて、丈夫であるやうにと、絶えず願ひました。私の夫は私の機嫌の變る度に無益の心配をしました。私は夫が私よりもこの子を一層愛してくれ、事を望みました。子は兩人のものですから、それが私を幸福にしました。

(四)三十一歳にて結婚、今三十四歳、二兒あり。數年子を望んで居たので、妊娠した時は非常に喜びました。しかし妊娠中は絶えず心地が勝れず、夫も仕合せではなかつたが、妊娠してからは、夫が以前にもましていとしく、間柄が更に密になりました。私は子の爲に一層家庭や庭園を好みました。私は子を得るためには、どんな苦痛をも、死をも辭せぬつもりでした。私は二重の責任を感じ、

未來の計畫をしました。私は澤山の美しい繪を見て喜び、聖母マリヤの感じを實感し、立派な子が生れることを望み又危ぶみながら、心が動搖しました。

この他かやうな感想が澤山あげてあります。妊娠や出産の感想は本人の外分らないもので、その経験のない者は、如何なる文章家でも、之を切實に現はす事はできないものです。是は今後子供を生む婦人の爲に、非常に有益な參考となるのみならず、文學としても一種特別の興味のあるものですから、かゝる経験を持つて居られる我が國の婦人も、どうかありのまゝに、その経験を發表せらるゝ事を望むのであります。

一 母の完成

母といふものは、人間に限つた事ではありません。下等動物にも母はあります。併し昆虫の如きは、母が卵を生みつけて置くだけで、卵が蟲になる頃には、もはや母は居ない。又母が居なくても育つのです。それで母は卵を生んで置きさへすれば、その役目は済むので、それは本能的にする事で、別に修養も何も入る事ではないのです。たとひ卵が蟲になる時、母が生き長らへて居ても、別に子に教へる必要もない。更に進んで高等の動物となると、母が子を生んだ後に、乳をのましたり、又食物を取る事を教へたりするものもあるが、そのために母が別に修養する必要は

ないので。例へば猿の母の修養などといへば、既に滑稽に聞える位のもので。處が人間となると、母が子を只生みはなして置いただけでは、子は育たないので、よしや乳をのんで身體だけは成長するにしても、精神が發達しなければ獨立する事はできない。即ち人間となつて初めて、教育らしい教育が必要であつて、その教育は唯子を生むだけの働きである事はできないので、こゝに母としての修養が必要となつて來るのです。

人の母は先づ胎内で子を作り上げ、生れた後には之を育て上げる。即ち教育といふものは、妊娠の引きつづきの仕事で、最も母に適當な仕事であるといつてよい。それで婦人の天職が子を生むといふ事はかりでなく、生んだ後の自然の引き續きとして、教育するといふ事がなくてはならない。即ち子供の教育は妊娠の如く、婦人の、殊に母の天職であります。文明が進むと、生活が複雑になり、その内容が進んで來るから、従つてその準備を與へる教育が長くかゝる事になる。野蠻人の子は親

のする事を見やう見まねで、いつの間にか覚えてしまふが、文明人の子供は唯見やう見まねだけでは、一人前にはなれないので、特別に教育しなければならぬ。従つて文明人の子は子供の時、換言すれば未成熟の時期が長い。文明が進む程、人の未成熟期はのびる傾きがある。身體は凡そ二十年位で一通りの成長を遂げるが、精神の方はその後までも教育が續くので、高等教育を受けるとなると、二十五歳位までかゝるし、長いものになると、三十位までもかゝる事があります。

それならば母の教育といふのは、その中のどの邊を受け持つのかといふと、普通には幼時の教育が母の受持のやうに考へられてゐる。併し後にもいふやうに、母の教育は幼時だけのものではなく、成長の時期を通じて行はるべきものであります。昔から、婦人が母となれば、母の本能といふものがあつて、修養をつまななくても、自ら母の任務は盡されるやうに、多く考へてゐました。それで瑞典のエレン・ケイも、「母心は理解されるよりも一層多く歌はれた。母の本能はあやまつ事のない

もので、別に之を教育する必要はないと、吾々は誤想してゐた。従つて今日まで母心は教育されずに放つて置かれたので、母心は盲目で未熟で無法な事も少くなくなつた。母の本能は無學の爲に子を殺し、又子供の最も尊き心身の所有を奪ふ事を、防ぐことができなかった。されば母心はいつも神聖で間違なき力であるとの感情的見解は止めて、之を教育せねばならぬ」といつてゐます。又英國の哲學者スペンサーは「解剖を學ばないで外科醫となる者があれば、吾等はその大膽に驚き、その被術者を憫れむだらう。然るに身體、知識、道德に關して何等の見識なしに、兒童教養の難事業を親が始めても、親の向見ずに驚き、犠牲たる子を憫む者なきは不思議ではないか。心身の開發は準備なしにできる様な簡易な仕事ではない。それに準備をしないといふのは、狂人ではないか」といつてゐます。又「母の道」の著者スミス夫人は「今日地上のあらゆる専門家の中で母といふもの位、自己の不朽なる事業に對して、素養の乏しいものはあるまい。多くの母は幸にして正しい天性を授けら

れて居るが、悲しい事には、正しい見識を有する母は至つて少い。子供の生涯はど
うならねばならぬかは、大概立派に心得てゐるが、さてどうすれば望むやうな結果
が得られるかを考へてゐる母は、甚だ少い。それで今日の急務は、この問題に對し
て聰明なる見識を以て、自然の儘放任された状態を變へて行く事である、約めて言
へば、丁度他の學問を研究するやうに、思を潜めて母の道を研究し、母の天性に加
へて、眞の條理を會得した母となつて貰ひたいのである」と言つてゐます。

これらの希望は、西洋の人が西洋の母に向つて訴へたのであるが、それが又適切
にわが國の母にも當てはまるやうに思ひます。西洋の母は概してわが國の母よりは
高い教育を受け、従つて教育上の見識を備へてゐるに拘らず、かやうな注意が入る
のを見れば、わが國の母には一層強くこの註文をしなければならぬと思ひます。
實際子供を抱いて往來でも歩いてゐる婦人に、この子供はどういふ風に教養なさを
積りかと言つて聞いて見たら、判然とした答をする婦人は少いだらうと思ひます。

何とかしよう位は考へてゐるでせう。即ち教育の目的の意識はあるでせうが、さて
どうすれば良いかといふ事になると、默然として手も足も出ない様な婦人が多くは
ないでせうか。今日の婦人は、先づ母に目覺めねばなりません。婦人が子供を生め
ば、自から母心は出て來ます。この母心はいはば鑽石のやうな物で、その儘にして
置いては、往來の砂利石と變る所はない。これを切つて磨きをかけて、初めて金剛
石の光輝をも發するのです。日本の母はいはば鑽石の儘に轉つてゐる石のやうな物
です。それに磨きをかけるといふのが、即ち母の修養であります。

先づ子供の教育の身體の方面からいふと、母としては第一に育児の心掛がなく
はならぬ。妊娠中にも衛生に注意して、丈夫な子を生む準備に遺憾なきやうにせね
ばなりません。そして生れた子供は強くても弱くても、母が育てて行かねばませ
ん。不幸にして弱い子を生んだ時には、運が悪くて弱い子に生れついたので、母に
罪はないやうに思つてゐるが、偶然に弱い子に生れて來るものではないのです。よ

しや弱い子に生れて来ても、母は決して絶望すべきではありません。随分育て方に
よれば、立派に強い子に育て上げられぬ事もないのです。

佛國の文豪ヴィクトル・ユーゴーは、「生れだちには非常に弱くて、片足は棺桶に
入れて居つた。首はうなだれてこの世の者ではなかつたが、それを母の丹精で育て
上げられた」といふ事を「秋の葉」と題する詩集の初に歌つて、母に感謝してゐま
すが、その弱々しいユーゴーは、八十餘年の長壽を保ち、佛國、否恐らく世界一の
小説家として、存生中既に佛人には神の如く崇敬されたのです。若しこの子はとて
も弱くて育たないと、母が見切をつけたなら、ユーゴーは恐らく生れて間もなく死
に、その貴重なる作物は地上に贈られなかつたでありませう。

それですから、生れた以上はどんな弱い子でも、絶望せずに母は育て上げる決心
がなくてはなりません。併し決心だけでは育たないので、そこに育児上の知識と熟
練とが入るのです。

二

然らば日本の母は、果して育児上の自信を持つてゐるかといふと、随分でたらめ
の事をして、育つべき子をも殺してしまふやうな事がありはせぬか。充血に貧血の
手當をして見たり、風邪の熱と食物の停滞から来た熱とを取り違へたり、極めて簡
單な育児上の知識があれば助かるのを、みすみす殺すやうな事が随分ありはせぬで
せうか。實際文明國の中で、わが國ほど幼児の死亡の多い國はないのです。妊娠か
ら出生後一年までの間に死ぬ子が、全體の凡そ四分の一、即ち一年未滿で、四人中
一人は死ぬといふに至つては、國家の爲にも寒心すべきです。これは母たる婦人の
體格が強壯でなかつたり、栄養が不足だつたりする事も原因でせうが、又育児上の
知識熟練の缺乏による事も、與つて大いに力があると思ひます。

それで母の修養といふのは、只哲學の本を讀んだり、或は小説を讀んだりして日

を送る事ではないのです。先づ育児に關する修養を積むことが必要です。實際初めて子供が生れた時には、母は唯これが自分の子といふものかと、不思議がつてゐる位のもので、どうしていゝか分らない。でたためをしてそれが偶然に育つといふやうな、實に覺束ない手並に、子供の最初の運命が託せられるので、大膽とも無法とも言ひやうのない次第です。女學校でも、それは裁縫も大切でせうが、それよりも一層根本的な育児の準備を、徹底的に與へる事が急務だらうと思ひます。それで母の修養の第一は、育児に關するそれであらねばなりません。

次に子供の精神教育に就ていふと、これは身體の養育よりも一層不用意無準備です。體の方は昨日桃を食べさせたから疫痢になつたといふやうに、因果の關係が近くて割に判然してゐるから、一度で懲りて二度と同じ徹を踏まぬ事があるが、精神の方になると、さう因果關係が近くもなく、判然もしてゐないから、母の教育の遣り損ひに氣がつかない。従つて改める事もしないので、遂にそれが積り積つて目に

見えるやうになつた時には、もはや後の祭で、立派に不良少年少女にしてしまつた時です。さうなると今更慌てても間に合ひません。それで間に合ふ中に子供の教育は、注意して施して置かねばならぬのです。取り扱ふものが精神であるだけに、一層深き母の修養が必要なのであります。

精神の發達は小さい時程著しいもので、身體でも生れて半年の間に、生れた時の目方の倍になり、後ほど目方の増し方の割合が減じます。精神の發達も小さい時程著しく、それで迅速發育の法則などといつて、一つの法則の如く見做す學者もある位です。實際生れて一年の間に、子供が言語も通じないで、他人の補助を仰がず、一人經驗して學習する事は、非常に夥しいものです。生涯のどの一年間に、最初の一年間程のものを學習する事が出来るか、とてもそれは出来ません。「若し子供の發達の割合に、生涯發達したならば、人は皆天才となる」とゲーテは言ひました。それが凡人となるのは、後年程學習力が鈍るからです。それで小學校に行く

までの最初の六年は、生涯の他のどの六年よりも、教育上大切な時期で、生活の基礎的準備は、學校以前の家庭生活の中に出來るといつてもいいのです。小學校から教育が始まるやうに思つてゐるのは、大間違であるのみならず、始めて小學校に入學して、ずっと並んだ子供は、もはや精神的にも身體的にも、餘程の違ひがあるので、それまでの六年間の家庭の教育の結果が、皆それぞれの子どもに出てるので、皆その家庭の子供であるといふスタンプを捺されて並んでゐるのです。それは身體上の相違よりも、目に見えぬ精神上的の相違が一層著しい。若しこれが見えようものなら、初めて小學校の門を潜つた子供の中にも、非常に著しい相違が分るのです。即ち家庭の六年の教育を身にしまして、それぞれ一年生は學校に乗り出して來るのです。それが教師の教へてゐる間に出て來て、流石はあの家庭の子供である。この母にしてこの子ありといふ事が分つて、光を放つことともなるのです。「母の名を汚すも雪ぐも娘の育ちのよしあしから」と、近松は言つてゐますが、實にその通りです。

實際教育といふものは、學校に行くやうになつてからよりも、その前が大切なのです。小學校から始めるのは既に手遅れです。小學校に行くまでの子供は、殆ど全く母のものといつても宜しい。そして最も神經の陶冶性に富んだ、感覺の鋭敏な時代に、母が附いてゐるのですから、母の一舉一動、一言一行は皆子供に影響します。

人格といふものは、種々の習慣の合してできたもので、習慣となつたものは意識しないで自から發動するものです。従つて母が立派な人格者であれば、その不用意の間に言つたり行つたりする事が、皆立派なもので、それが子供に良い影響を及ぼす事になるのです。日常生活は殆ど習慣で遣つて居るので、心理學者ゼームスの言ふやうに「人は習慣の利子で生きて居る」やうなものですから、人格が出來上つて居れば、努めてする事でなくとも、自からそれで良いのです。

修養の理想は、つまり各方面の善良の習慣を養成して、其行爲が思慮を経ないでも、自から善良なるにあるのです。修養はそこまで達する事を目的とせねばならぬのです。それで若し母が立派な人格者であれば、子供はいつも、その人格の空氣に浸り、呼吸してゐるやうなものです。動物にはそれぞれの臭があります。狐には狐の臭、虎には虎の臭がある。動物園に行つても、その檻に近づけば物を見ないでも、こゝに狐がゐる、虎がゐるといふ事が分る。人間にもいはば人格臭ともいふべき臭のあるもので、各の人に接すると、一種精神上の臭氣又は香氣を發して、相手に薰染するものです。

母親の人格は、寝ても起きても、いつも子供を薰染して、母親のやうな者にせずには置かないです。つまり母は子供の生涯の運命を決する鍵を、握つてゐるものと言つて宜しいのです。芝居でも、無暗に舞臺で切つたり突いたり、立廻りをするのが、必ずしも名優ではありません。岡十郎は唯舞臺に出さへすれば、坐つてゐるだ

けでも芝居になりました。人格者は唯そこに居るといふだけでも、それが働いて居るので、立派な母は唯居つてもらひさへすれば、それだけでも子供の教育になるのです。その上に言動が加はれば、それこそ教育の名優といつてよいでせう。

スミス夫人は「言ふまでもなく、子供に取つて最も偉大な、最も有力な、最も長い間手鹽にかける教師となるべき、又ならねばならぬものは母である。他からの感化には斷絶があるが、母の感化には少時の絶間もない。婦人に對する男子の意見を叩くと、其男子の母はどんな人であつたかが、大概分るものである」と言つて居ります。つまり男子の婦人觀は、その母に對する觀念が移されるものとすれば、男子の婦人觀によつて、その人の母がどんな人であつたかが分るのです。

三

ところが日本の母はどうであるかといふと、随分犠牲心の強い、自己を忘れて子

供の爲に盡すといふ、感すべき母は少くないが、それは母の本能から來るので、必ずしも修養を待つて然るのではありません。修養の深い立派な人格者であるといふ母が、割に少くはないかと思ふのです。この間も、夏休で歸省してゐる女生徒が手紙をよこした中に、

「この春まではまだ行燈を使つてゐました程の田舎でございますので、少しの買物さへ何里と出かけなければならぬので、先生などは、この生活は想像して下さいます事も、なかなかと思ひます。どなたでも、田舎にお出でになりましては、お感じになる事でございませうけれど、まだ可愛い小さな子供が、母親に何でもない事を口やかましく叱られるのを聞いたり、まるで雨ざらし日ざらしの案山子のやうにして、背負はれました赤ちやんを見ました時、言ひ得ぬ悲しみを感じます。金を貯へることは、細かな注意を拂ふ親たちはあつても、子供の靈の成長には何一つの心やりを持たぬ人々の多い事を、痛切に感じます。義務教育だけは、大抵受

けてゐるやうでございすから、一般の人々に今少し讀書の風を勧め、品性を磨き、數理的な頭を持つて貰ひたいと願つてゐます。併し一等早く知つてほしいと思ひますのは、親たちの子供をもつと愛してほしいといふ事でございす。心からの温かな愛を、どの人でも子供には持つてゐませうけれど、幼い時から大聲に叱られがちでは、遂には其愛を見出さずして、子供は終るであらうと思ひます。若し此田舎が先生のお宅に、餘り遠く離れてゐませんのなら、お氣の向く時にお出でを願ふことが出来るのにと、時々感じます。

と書いてありました。飾も何も無い、そのまゝの感じを述べたものですが、これがこの地方だけの事でなく、日本全國を通じての事ではないかと思ふのです。實際田舎に行つて見ると、母親が兎角がみかみと幼い子供を叱りつけてゐるのを見ます。それで病氣になれば心配もし、死ねば泣くので、子供が可愛くないのではないが、いかにも同情がないやうに見えます。これは一つは生活に追はれて、焦々

した気分であるため、それを子供に洩すので、子供が飛んだ飛沫を受けて居るわけなのでせう。されば家庭教育は生活問題と關聯するので、日本も少し生活が豊かにならねばいけません。

或母はその初めての子供を生んだ時から、子供の爲に少くも日に一時間づつは、静に思をこらして考へる事にきめました。それでその時間になると、子供の將來を考へ、性質を研究し、正しい道に導く手段を案じたのです。若し見物とか訪問とかの時間が之にからあへば、何でも構はず「先約があります」と答へてゐたと言ひます。その位にして子供の教育に注意すれば、きつと立派な者になるに相違ありません。

所が實際はよそから招待などを受けると、教育などはあつたものではなく、それが先約で、子供の教育は後約にする母が多いと思ふのです。昔スバルタでは、子どもが罪を犯すと、その父が罰せられたといひますが、今日は不良少年少女が随分多く、警察に引つぱられたり、牢屋に入れられたりするが、親は何等の制裁も受けません。春秋の筆法を以てすれば、實は親がしたのですから、親が警察に引つぱられ、牢屋に入れられなければなりません。それを親の身代りに子供が行くのだから孝行者で、飛んだ親孝行な子を持つた親があればあるものです。

以上は主に道德の方面の事ですが、知識の方面に就ても、母親には澤山の註文があります。子供は三つ位になると、能く色々な事を聞くもので、なぜかといふ間を盛に發します。その際に母が子供の理解する程度に説明し、知識を提供してやると、子供は知らず識らずの裡に色々な事を覚えるのです。母は子供に問はれる機会を、無數に持つてゐる自然の教師ですが、それに返答ができませんで、空しく好機を逸する事が多いのです。例へば往來で子供が小石を拾つて來て母に示し「この筋のあるのは何か」とか「この石とこの石の色が違つてゐる」とか言ふ時に、母は何等の説明もできない。或は電車を見てボールが一本だとか二本だとか、レールが地か

ら上つてゐるとか、地に埋つてゐるとか、能く見た事を話すが、母は電車に就て何も子供に話すことが出来ない。魚屋が魚を持つて来ても、只これはさしみにするとか、焼くと甘いとかいふが、動物の話は少しも出来ない。その他地理歴史のことを聞いても、字劃を聞いても何も分らぬやうな母であると、子供は非常に不本意に思ひ、勉強心をそがれる許りでなく、實際知識を得る上に大損をします。小學校の五年六年になると、地理や歴史の試験があると、母に教科書を預けて問うて見ても、母が問ふと答へて、正して貰ふといふ風に、母が少し物が分ると、子供の學習上利する所が多いのです。それが何を聞いても分らない、知識慾のまるでない、冷淡な母であると、自然に子供も學習に興味を持たなくなりませす。

「自分は親の作つた家庭にゐる間は、唯食つて着て、眠つては起き、眠つては起きして大きくなつたが、自分が家庭を作つて、何もかも自分でやつて見ようと標をかけて見て、初めてわが知識の餘りに淺薄なのに、わが見識の餘りに幼稚なのに

驚いた。なぜ自分はいかにも思慮が足りないのか、なぜもつと役に立つ知識を貯へて置かなかつたらう。殊に科學の知識には痛切に之を感じ、育兒上に一日も等閑にして置かれぬ事を思はせられる。

子供がこれは何、あれは何、なぜ、どうしてといふやうに根掘り葉掘り、一日遊戯の間に無數に發する間に對して、明に適切に誤なく答へ得るお母様が、現代果して多くあるだらうか。自分の經驗から思へば、母として内心、あゝこゝまでは話してやる事が出来たが、此先今一步突込んで聞かれたらどうしよと、實に薄氷の上に立てる心地のした事幾度であつたらう、又能く母さんも知らないから、今度出た時調べて上げようとか、誰かに聞いて上げようとか、告白的お預りにせざるを得なかつた事も幾度もあつた。失禮ながら私と同感のお母様の幾人かが、まだ今の社會には居られる事も思はれる。これらの事は、どうしても科學的思想に於て、教育的實行に於て、今一段高い知識見解を備へ、理想を抱いた所

のお母様にならなければ、立派な解決はつかない事と思ふ。」

とは、女子高等師範の或る卒業生が、母となつての感想であります。女子高等師範といへば、わが國の最高の女子教育を授ける學校ですが、その學校を卒業した者でさへ、母となつては自分の知識の不足を、これ程に感じてゐるのです。世間一般の母親は知識の程度がらひへば、これより低いのですが、却つてその方は一向平氣で子供を教へる上に自分の知識の不足を自覺することすらない。知識の不足を歎ずるのはめでたいので、一般の母は早くそこに思ひ當り、修養の一日も忽にすべからざる事を、自覺するやうになつて貰ひたい思ひます。

母の教育といへば、子供の幼時に限るやうに思つてゐますが、實は子供の教育時期を通じて、母の教育は行はねばならぬのです。小學校はともかく、女學校はまだしも、中學校となると、もはや大概の母は子供と太刀打は出来ないで、讀本位はまだ母の方が知つた字が多い事もありませうが、數學などになると、中學一年か

らてんで母は分らない。やむを得ず家庭教師を頼む事になるのです。文明國の教育ある母といふものは、そんな者ではないのです。男の子の中等教育に對して、もはや何等の興ふる所もない、一口も口がきけないといふやうな賢母も變なものです。子が大學に入つてからでも、随分母が子に或物を興へるやうになつたからとて、不思議な母であるわけでありませぬ。

つまり日本の女子教育は、程度が低いから、母親といふものの知識の標準が従つて低いので、中等學校以上は、母の教育の領分ではないやうに、一般がきめてしまつてゐる程度であるのは、情ないわけです。さういふと多くの母は笑ひごとのやうに思はれるかも知れませんが、全くまじめな事で、今後の母親は子供の智育に於ても、一層多く興らねばなりません。

英國のアーサー・バーン伯夫人は「若し教育が幼時に限られたらもので、子が大學に行けば大學の教育に壓倒され、軍隊に入れば軍隊の教育に壓倒されて、其年頃の子に

母の教育が、何等の力もないものであるとしたら、實に母の教育といふものは詰な
いものである。母は子が大學を出ようが、年を取らうが、子はやはり母と相談して
母からよい智慧を得る事ができ、又社會の大切な出來事に就ても、母とまじめに話
しあひ、母も意見を述べる事ができ、子からも得る所があるやうにならなくてはな
らない。母の教育は子供の幼時に限るやうな、そんな短い、後年の他の教育に負け
てしまふやうなものであつてはならぬ」と言つて居ります。

さういふ母親が日本に幾人あるでせうか。子が高等教育でも受けければ、子の母に
對する態度は、母は何も分らぬ人として、唯母であるといふ事だけで交際してゐる
風です。これで本當の母親の任務を盡したといへるでせうか。賢母といふ事が出來
るでせうか。それで今後は賢母の評價を高くし、その標準を上げる事が必要で、今
後の賢母はこれまでのやうな賢母では足らぬといふ事を自覺して、母たる者は一日
も修養を忽にしないやうにしたいものです。

近頃は母の會などいふものが出來、時々寄り合つて教育上の經驗を話し合つた
り、意見を交換したり、讀んだ本を紹介したり、又は専門家を聘して、種々の講話
を聞いたりする事が、行はれかけて來ましたが、これは大層結構な事です。これが
一般的になり、世の母が現狀に満足せず、少しでも向上の道をたどる事に努力され
るやうにしたいものであります。

一〇 昔の婦人と今の婦人

今の若い婦人を昔の婦人に比べると、長所もあれば短所もある。先づ身體に就いて云へば、今の若い婦人は、學校に於て、正式に體操を行ひ、其他遠足、登山、旅行などをやるから、一般に昔の婦人よりは身體が發育して、筋肉が緊り、動作が敏活で、姿勢が正しく、歩行も立派である。然し多少男性的になる傾きはあつて、昔の婦人の嫺々とした所は減つたやうである。又若い娘が母親と往來を歩いてゐるのを見ても、大概は娘の方が丈が高いやうである。人種の身長が、體育によつて伸びるか如何かは議論のある所であるが、日本人はこれまで居坐を初め、生活が窮屈であつたから、人種の身長が自然の發達に到らなかつたので、脛腰を伸ばして、自由に生活するやうになつてからは、女子も身長が多少伸びるやうになつたのかも知れない。

い。而してそれは人種の身長標準が變つたと云ふのではなく、自然に返りつゝあるものと云つてよからう。

次に精神の方面に就いて見ると、今の若い婦人は、學校に於て系統的教育を受けてゐるから、知識が多方面に互つてゐる。殊に理科の知識の如きは、昔の婦人は殆んど無く、唯經驗でやつてゐたのである。今の若い婦人は一通りの理科の知識は持つてゐて、これを家事に應用する事が出来る。然し昔の婦人は經驗を積んで、實際には却々上手な事もある。器具の保存だとか、料理の仕方だとか、理屈はなしに、經驗から上手にやつて、却つて今の理屈だけ知つたものよりは、實際の成績を擧げる事もある。今の若い婦人には歴史や地理の知識もあり、日本が歴史的に、地理的に如何云ふものであるかを知つてゐる。又世界についても多少知つてゐるから、國家に對する女子の責任と云ふ事も多少は皆感じてゐる。昔の婦人は眼界が狭いから、家庭以外に自己の影響を考へることは餘りしなかつた。今の若い婦人は數學なども

一通心得て居るし、科学も修めるから、理性が昔の婦人よりは發達して、何事も獨斷的でなく、其理窟を考へるやうになつた。昔の婦人は經驗から來るのであるから、一度行き詰まると、何うしてよいか判らなくなる。

又昔の婦人は、主に命令によつて動いてゐたので、自主的でなく、他主的であつた。唯獨斷的に命ぜられたまゝにしてゐた傾向があつたが、今の若い婦人は、服従する前に先づそれが正しいか、正しくないかと云ふ事を考へる。即ち批判的になつて來たのである。服従と云つても盲従でなく。理解のある服従をせんと欲する。昔の婦人は家庭本位で、家人のために自己を犠牲とする事を厭はず、如何なる困難にも能く堪へたが、今の婦人は昔の婦人よりは利己的で、自己本位で、犠牲心や耐忍心が少くはなからうか。昔の婦人は舅姑に仕へ、夫に仕へる事を第一の務としてゐたが、今日は夫婦本位になりかけて、舅姑に仕へる事が、昔よりは忽忽になつてゐまいか。舅姑本位と云ふよりは夫婦本位である。然し夫に對しても、「手足の爪を

放しても皆夫への爲ぢやもの」と云ふ程の打込み方は、今の若い女子には少いであらう。

昔の婦人は自己を犠牲にして、能く耐へ忍ぶ事をしたが、今の婦人は何方かと云へば我儘で、耐へ性がないやうである。少しの困苦も聲を大きくして訴へ、氣に入らねば離婚するまでとして、昔のやうに死んでも實家へは歸らぬと云ふやうな決心はなくなつたやうである。

今の若い婦人は生活の安固を慮かつて、職業的能力を養ふ事を力めるやうになつた。結婚しないで獨身でゐても、喰ふに差支のないやうに、又結婚してから、夫がなくなつても生活に困らぬやうに、子を擁へても、生活や教育に差支ないやうに、將來を慮かつて、自活能力を養つて置くに心掛けてゐる。昔の婦人は、夫に一身を託した限りで、不慮の不幸に就いての準備と云ふ様な事などには、餘り注意しなかつた。従つて自己の意志を行ふ事が出來ず、盲従的で意氣地のないものとなる傾

向があつた。それで随分悲劇的生涯を送つたものも少なくない。

昔の婦人は唯家庭に育つて、世間を見ないから、心が狭く、社會馴れない。従つて家庭に於ても嫁との不和衝突などが有り勝であつた。今日の若い婦人は學校に行く。學校は皆同じ要求權利を持つた、同じ年輩の者の多數の集まりで、つまり社會である。こゝでは我儘を爲る事が出来ない、他の權利を認め、自己の義務を行はねばならぬ。従つて人間が社會化されて、世間馴れてくる。心も大きくなり、同情も思ひ遣りもある。従つて學校教育を受けた女同志が、嫁となり姑となつた曉には、昔の嫁姑ほど互に窮屈に感じないで、融通がついて、一層家庭が圓滿に行くと思ふ。學校が學藝を授ける事は結構であるが、それ以上その生徒を社會化することは學校特有の作用で、看過すべからざる學校教育の利益であり、殊に女學校の有りがたみはこゝにあるのである。

一體西洋の婦人は、日本の婦人から見れば、教育も高く、能力もあつて、家庭の

みならず、國家社會に對しても大なる働きをしてゐる。今度の戰爭に於る女子の活動振りは實に目醒ましかつたので、あれまでに働けるものとは、西洋人自らも考へて居なかつた事である。従つて戦後の婦人の活動も、一層著るしくなり、職業の範圍も廣がつて來た事である。今日の我國の若い婦人は、昔の婦人に比べると、餘程積極的、活動的になつて來たが、これを西洋の婦人と比較すれば、まだ餘程消極的、退嬰的の處がある。それで今の若い婦人は、其の長所を捨てないと同時に、西洋婦人の長所も採り容れて、一層能力あり、積極的に働くやうにしたいのである。

終りに、昔の婦人と今日の婦人の最も著しい違ひは、昔の婦人は自己の價値といふものを十分に意識して居なかつたが、今の婦人は自己に眼覺めて、生の使命を深く高く見、自己の眞價を發揮せんと努むることである。婦人の自覺といふ事が、恐らく今日の婦人の、昔の婦人に比して、最も貴い長所であると思ふのである。

一 女性の種類々

女子は見方によつて種々に分類することが出来る。例へば人種によつて分けることも出来るし、心理學上から分けることも出来る。しかしこゝに述べやうといふのは、實際社會生活に現はるゝ女性の種類々である。

一、男子は養はるゝ女子 これは嫁して妻となり、母となり、終生男子に頼つて生活する女子で、女子の普通の運命である。「人生婦人の身となる莫れ、百年の苦樂他人に由る」などと唐人も言つて居る。自分の運命は夫次第である。同じ女學校の卒業生で、在學中は「無二の親友」であつた者も、結婚して夫の身分が違へば、區別も出來て、一方は頗る得意で威張り、一方は肩を窄め、腰を低くして言葉も改まる。一方は女學校の同窓會などが、自己の出世を示す好機會で、できるだけ盛裝

して、手車で乗りつけ、同窓に自己の勝利を誇示するから、その出來ぬ者は出席せぬやうになり、同窓會は夫の後援の下に「立身出世」の展覽會となり、三國一の婿を取り當てた祝賀會のやうなものになつてしまふ。社交に立つ婦人の多くはそれで、何の何子で出るのでなく、某夫人何の何子で押出すのである。即ち何子の價値は何子その人にあるのでなく、その夫にあるので、太陽の光を假りて、青白く光る月のやうなものである。だから某夫人の肩書を取つて、丸裸で名乗つたならば、まづは見向くものもない。即ち多くの女子は自己が何であるかに生くるにあらずして、自己の夫が何であるかに生きて居るのである。しかしこれまでの女子は一向平氣で、女子はさうしたものと、極めて仕まつて居た。ところが近來人間の尊嚴とか、個人の價値とかといふことが高唱せらるゝ事になつたから、女子も自己は何かといふ事を考へるやうになり、自己に生きなければならぬといふ自覺が起り出し唯夫に依り縋つて無我無宙に生活するといふ事はどうであらうかと、そろそろ疑ふ

やうになつた者もある。しかし大多数の女子は相變らずこの無我無宙組で、今後も可なり長い間は過ごすことであらう。かゝる女子は夫次第のものであるから、夫が榮えて居れば萬歳であるが、夫が落魄するか、死にでもすると、爪をもがれた蟹のやうに、手も足も出なくなつて、昨日に變る今日の有様、女ほど果敢ないものはない、女の運命ほど分らぬものはないといふことになる。

男子に養はるゝ女子もまた、二種類に大別することが出来る。その一は良妻賢母で、良く家事を治め、夫の内助者として有効に働き、又子を産んで良くこれを教養する者である。これは女子として最も自然なる、又その能率を最も高く發揮し得る天職であつて、一般に婦人はこれにならねばならない。これは女子の自然の分業に従事するもので、これを行はうとすれば、勢ひ自活がむづかしいから、夫が生計費を稼ぎ、妻がこれを消費し、これに由つて生活することになる。故にこれは實は男子に養はれて居るのではなく、立派に女子が自分で食つて居るのである。女中

でも今日は食はした上に相當の給銀を與へて居る。妻は女中とは比較にならぬ働をして居る者であるから、それに對しても食ふ權利は十分にある。それで食はしてやると思ふのも、食はして貰ふと思ふのも共に間違ひであつて、妻は立派に自分の力で食つて居るのである。それで女子が能く良妻賢母の本務を行ふのは、女子としての自己の價値を、最も良く發揮する所以なるを自覺し、又能くこれを遂げれば、男子に養つて貰つて居るといふやうな皮相的名義の下に、男子が女子を壓制する權利もなく、女子が御無理御尤で盲従する義務もない譯である。しかし生活上唯夫の稼ぎを當てにすることは心細い事であるから、女子も自活能力を養ひ、平時も本務の餘力があらば、自分も稼ぎ、自活の必要ある時にも、困らぬだけの準備はしておくが賢い仕方である。

かゝる堅實な女子は、夫を笠に着て餘り社交などに出ることをせず。家庭のクインとして、内助に、子女の教養にいそしむ者である。この種の婦人が女子の中堅

であつて、又國家乃至人類の強み、恃みの存するところである。

第二は如字的に男子に養はるゝ者、夫に寄生する者で、唯女であるといふ所が取得である。従つてめかし、飾り、女といふことを誇張し、媚を夫に呈し、一種の満足を與ふる道具としてのみ生きて居る。家庭的娼婦などといはれるのもこれが爲である。この種の女子は餘り子を産まないし、又産むことを好まない。子供があつては厄介で、自己の歡樂を十分に求めることが出来ないから、避妊などもする。さうしていつまでも若作りで、顔の皺を白粉で塗りかくし、内を外に遊び歩く。夫は妻の會計係りで、妻の化粧、贅澤、遊興の費用を辯ずる爲に、汗水たらして稼いで居る。それで追付かぬと犯罪などをするやうになる。西洋にはこの種の女が多く、益々多くなる傾がある。やれ芝居の、音樂會の、ダンスの、會食のと、歡樂を求むることにのみ熱中して、家庭といふものは、寝るのと化粧の場所に過ぎない。かかる女は米國を第一として、歐洲にも随分少くない。戦後は娼婦と共に、一層多く

欠

欠

べき子供の無い事をも、頼りなく物足らないこととも、感ぜないでもあるまいが、自己の事業を夫とも子とも考へて、勇ましく豊かなる生活を営むことが出来るのであらう。

しかし女子が子を産んでくれなかつたらば、どうであらう。すべてが一代の後は無に歸するではないか。多数の女子が獨身を選んだならば、人類は衰滅に赴くであらう。それ故に女子はやはり従來通り、原則として結婚して、家庭を治め、現代の後繼者を生み、養ひ教へなければならぬ。又正常の女子は本能的、生理的に男子を求め、子を欲するものであるから、今後とても多くの女子は、出来さへすれば、結婚するであらう。つまり獨身の婦人は例外であらねばならぬ。今日女子の自活や、社会的活動といふ事が、よほど勸説せられるが、それは女子の獨身生活を獎勵するのではない。良妻賢母たるべきことがあまり言はれないのは、當り前の事で、今更改めて云ふに及ばぬからである。従來日本婦人のあまり携はらなかつた、社會

的活動の方面を力説するのは、その缺陷を補ひ、世界の進歩と歩調を共にして、文壇婦人たるに遺憾なからしめんが爲である。

以上は現代の我が國の女子を、社會的に觀て分類したのである。固より微細に亘つて分類すれば、まだ幾らも分類できるが、こゝには唯大體に止めておく。女子が自ら顧みて、自己はいづれの部類に屬するかを考へ、自己を客觀視することができたらば、今後行くべき道の多少の參考とならぬこともあるまい。

二 有名と無名

人間は謙遜して居るやうで、實は出しや張りたがるものである。大勢の中に隠れて、人の目につかずに、そのまゝ過ぎるといふことが、仕たくないものと見える。そして首縊りでも何でも構はぬ、何か變つた目立つた事をする、世人はその人に注意する。従つて有名になる。八百屋あ七は、火をつけた爲に名高くなり、さうして火あぶりに遇はんとした爲に、一層名高くなつた。「哀見に寄諸見物、あそこや爰に立集り、何と此科人もモウ來さうなものぢや、おれは牢屋を引出すと、直と通り町へ駈けぬけ、それから川岸へ廻つて、以上四たび見た」と、仕置場鈴ヶ森にての見物の立話し。以上四たび見たもないものだが、變つた事に駈け寄るが、人間の自然と見える。されば何がな變つた事をして、人目を聳動せんもの、大概人はたく

らんで居る。

中にはそのつもりなしにやつた事が、案外名高くなつたものもある。詩人イロバンは翌朝起きて見たら、自分は有名になつて居たと言つて居る。これは自分の認めなかつた詩才を、世間が認めて呉れたので、名實の相伴ふものであるが、中には少しも伴はぬのがある。自殺した某博士の娘は何故に有名であるか。何故に雷名を天下に轟かして、孔子は知らんでも、その娘は知つて居るのであるか。されば名が高いとか低いとか、有名だとか、無名だとかいふことが、必ずしも人間の眞價を極める標準にはならぬのである。しかし今の人は、皆名に憧れて居る。我れを著しくしやうと、血眼になつて焦つて居る。泥鰯屋の前に立つて見て居ると、樽の底にウヂャウヂャして居る泥鰯の中から、時々水面に昇つて泡を吹く奴が居る。その瞬時に彼は他の泥鰯より自己を著しくしたものであるが、人間にも、その泥鰯の運命を慕つて、しばしなりとも、我れを著しくせんと構へて居るものが多い。しかし

大概は一度も浮む瀬がなくて、地の下を潜つて、それきりになるのである。

然らば婦人は何うであるか。婦人は、お花見をして、お嫁に行つて、御飯を焚いて、子を寝かして、お婆さんになつては、お伽話を孫にするのが、エバこの方の掟となつて、今に至るまで、その傳來を變へることをせぬ。かくて生き、かくて年取り、かくて墳墓に入る。これが一般婦人の運命である。この順當の生活をしたならば、何處に婦人は著しくなるであらうか、名高くなるであらうか。

女子は古來無名なるを以て、有名である。今日の世は、女子に教育を興へる世である。西洋思想の輸入される世である、そして女子が男子の如くならんとする世である。功名に憧憬るゝ世である。實力に副はぬ希望を懷いて、それが實現されぬといつて、じれつたく思つて居る世である。古來の無名を以て有名なるに甘んぜずして、新聞に書かれ、雑誌に載せられて、有名にならんとあせつて居る世である。而して其の得たるものは、何であるか。多くは虚名である、誘惑である、煩悶である、墮

落するものも亦ないではない。實力に由らずして自らを著くせんとするは災なるかな。

然らば女子は、知られず、聞えずして、過すべきものであるか。雄の蟬は喧噪にして、雌の蟬は、沈黙であるがために、雄蟬は生活し、雌蟬は生活せずといはれるであらうか。鳴くがために、雄蟬はその所在を知られて、子供の擒となる。寧ろ沈黙の安全なるに如かぬやうに思はれる。男子は鳴かねばならぬから、鳴くので、危険も随て多い。鳴かぬは、女子の本來の約束ではあるまいか。其の所在を知られず、著しくされずに生活するのが、自然ではあるまいか。沈黙は無爲の異名ではない。沈黙の活動なるものがある。女子の活動はそれではないか。

家庭の經營、出産、育児、教育、慈善、博愛の事業等、皆沈黙の中に行はれて、しかも大なる活動であり、價值ある生活であると思ふ。獨逸の文豪ジャン、ポールは言ふ、「英雄的所業の最大なるものは、四壁の中に、家庭の知られざる所に、遂行

せられるものである」と。

知られず、聞えざるは、婦人の常であるが、しかし時には例外もある。自己の實力に由つて世に著しくなつた婦人もある。その體力に、心力に、勉強に、忍耐に、奮闘に、常の婦人より卓越した所があつて、有名になつた婦人もある。結果は偶然に來ない。例外も斯ういふ例外は結構である。眞の實力に由つて、名を成せる婦人のあることは、好まじきことである。また學問、文藝に於て、卓拔なる婦人もあつてよいと思ふのである。

しかし土質が良く、肥料が良くなければ、如何なる種子も、立派に成長するものでない。日本では婦人が精神的に秀でたるものとなるには、餘りに教育が低く、修養の機關に缺けて居る。西洋と日本の女子の修養の相違、精力的水準の高低を見れば、我が國の女子はなほ實に痛はしきほどである。日本婦人の言説に、遺憾ながら程度の高きもの、敬聽すべきものの少いのは、偶然ではない。女子は唯手足だけ動か

して、忙しくして居ればよいと思つて居るのか。首から上は、人並み外れて、外からは研いて居るが、内が赤錆では困ると思はぬのか。髪は美事に梳いてあるが、心の鼻には鋤を入れぬでもよいと思ふのか。女子修養の機關も缺けて居るが、概して女子の奮發心もまだ缺けては居るまいか。この點に於て、我等は我が國婦人の熟考と努力とを望むのである。

一三 戦争の婦人に及ぼす影響

一

この度の歐洲の戦争は非常な大規模でありましたから、日本は別として、歐洲に於ける交戦各國の、十五歳から六十歳位までの男子の健康な者は殆ど全部、戦場に出で戦闘に従事しましたか、或は戦争に關する後方勤務に従事したのであります。随つて男子が、戦争以前に執つて居つた所の仕事をば、女子が執らなければならなかつた。戦争以前にはとても婦人の爲すべき事でもなし、又爲さしめやうといつても、出来る氣遣ひはないと思つて居つた事に、必要上から、婦人が従事しなければならぬ様になつたのであります。其中でも農業の如きは、戦争以前でもやはり婦人

が従事して居つたのでありますが、戦争中は農夫が多く戦場に出ましたから、婦人が農業に興る事の多かつたのは、言ふまでもありません。それも成年の婦人ばかりでなしに、学校の女生徒が耕作に従事し、空地に色々の物を植ゑるとか、畑を耕すといふやうな事を、随分致したのであります。是は當然の事として、その外會社、商店、銀行の仕事であるとか、或は郵便の事務、配達、鐵道の仕事、電車の運轉手、車掌とか、自動車の運轉手といふやうなものにも、澤山婦人がなつたのであります。が、なほ工業に従事して、男子の執つて居つた随分複雑な仕事も、力のいる仕事もやりましたし、殊に武器の製造には、餘程多くの婦人が参加したのであります。其中には、自分の愛する夫、父或は子の死んだものもあるし、なほ戦場に出て居るものもあつたから。それが使ふ武器である、或は討死した者の仇を取る武器であるといふやうな意氣込で、武器を造つたり、彈丸の装填をしたりしたのであるから、普通の事務を執つて居るよりも、餘程熱の加はつた働をした譯であります。なほ更に

進んでは、女子が兵士と爲つて戦闘に参加したといふやうな事が、露西亞などにはあつたのであります。斯ういふやうな事は、戦争前には殆ど夢想もしなかつた事であつて、實際必要に迫られて多數の婦人が、従来男子の爲すべきものとせられた仕事に従事したのであります。そればかりでなしに随分科學的の準備を要する仕事、例へば物理化學や、動植物學、醫學等の、實驗室に於て練習をしなければ出來ないやうな、色々な技術的の仕事にも従事したのであります。是等は即ち女子の高等教育が初めてこの戦争で、大にその効果を現はすといふことになつたのであります。要するにこの度の戦争は、女子の力がどれ位まで有るものであるかといふ事を、是迄唯想像に因て議論をして居つたのを、實地に試して、實際に示す機會を與へた譯であります。

それに就いて多くの人は、是迄の女子よりも實際今日の女子は、餘程其能率が高くなつた。是迄想つて居つたよりも、女子といふものは中々働けるものであるとい

ふことを、申すのであります。それは成程それに違ひない。是迄女子が何等の権利をも要求することの出来なかつた事で、女子が之を主張することの出来るやうになつたものもある。即ち政治上に於ても、女子の選挙権を獲得し、或は女子の代議士となつたといふやうなこともあり、餘程其方は進んで来たのであります。又平和の運動にしても、一體戦争は誰がするか、男子がするのではあるが、其男子は誰が産んだのであるか、皆是、婦人が産んだのである。然るにその婦人の産んだ男子が、戦争をするといふ事について、婦人が何等それに對して言ひ前を主張することが出来ない、戦争を止めることが出来ないといふのは、甚だ都合な話であるから、今後は戦争の始まらんとする場合には、女子が一致協力して、之を未然に防ぐ平和運動をしなければならぬといふので、平和運動も行はれて居るのであります。それは戦争以前からもやつて居たのであります。折角婦人が二十年もそれ以上もかゝつて育て上げた子を、塹壕の埋草にするといふのは實に情ない話である。我々の努力が無

駄になるのであるから、今後とも相變らず子を産む以上は、戦争に就いては豫め我々も相談を受けねばならぬ、といふやうなことを言ふのであります。一方また女子は色々な仕事をし、職業に従事しますから、女子の獨立自營の範圍が餘程廣くなつて来た。随つて女子が権利を唯理論上から要求するのみならず、實力の方面から要求するといふ事にも、なつて来たのであります。詰りこの戦争の爲に、女子が自覺を生じて、自分の力を認め、それに相當する要求をする機會を得た譯であります。又國家に對しての女子の意義、廣くは世界人類に對する女子の意義といふ事も、餘程自覺するやうになつたのであります。これらは大體に於て結構な事と思ふのであります。併ながら心理的又生理的方面から考へまして、この戦争が女子にどういふ影響を及ぼすものであるかといふ事については、餘り人が言はないやうでありますから、こゝには主に其方面の事を申して見やうと思ふのであります。

二

此戦争が生理的及び心理的に婦人に與へた所の影響の著しきものには、凡そ三つあると思ふのであります。其一は婦人の精神、殊に感情の激動といふ事であります。是は戦争そのものが既に、精神に非常な激動を起したのであります。殊に自分の夫とか父とか子とか、或は親類とかが、戦争に参加して居た場合は、内に居る者にはどの位心配の種であつたか知れない。さうしてそれも死ぬる歩合が少いならばまだ安心も出来るけれども、随分今日の戦争は大砲一發で數十百人を屠るやうな残酷なものでありますから、先づ生きて還る者が少いといふ、非常な懸念を持つて居らなくてはならなかつた。さうして其死ぬるか、生きて還るか判らぬといふ、懸念された宙ぶらりんの状態は、却て死よりも苦しいことがある。さうして十六七歳の青年の墓も累々として在るといふ。それよりも成人の戦死は多いのでありますか

ら、待つて居る中に、自分の夫が戦死したといふ知らせが来たかも知れない。或は父又は子の死んだといふ報知が来たかも知れない。斯ういふ打撃が女子に對しては如何に大なるものであつたかは想像するに難くないのであります。偶々還つて来たと思へば、手が無かつたり、足が無かつたり、或は盲になつたり、癡人と爲つて還る。或は精神病者と爲つて還つて、有りし昔の俤はなく、生きて屍となつて戻つたのもあるであります。その中には夫もあり、父もあり、子もあり、許嫁もあるであります。それらの事が皆感情の強い婦人に、非常なショックを與へたに違ひない。その爲めに色々神経に異變を來したとか、或は氣が變になつた者もあるであります。それが一時間限りでなしに、その生きて還つた者を、今後どういふ風に介抱をして宜いか、如何にして養つて行くかといふ事も心配の種であります。又生きて還らなければ、婦人が自力で今後生活して行かなければならぬ。寡婦と爲つたり、或は幼児をも遺されて、どうして此世を過して行くかといふ事を、考へなけ

ればならぬ事にもなるのであります。即ち寡婦の悲みといふこともありませうし、又頼りなき老後の悲み、女の瘦腕といふ心細さもあるであります。さうして戦争が済んで世の中が静になるほど、一層染々とその悲みは獨占的に味はねばならぬ。今はまだとさくさして多少氣が紛れて居りませうが、この苦い味は随分執拗く、永く味はねばならぬ。即ち婦人が唯戦争中に感情の上に、非常な激動を受けたのみならず、今後生涯其の影響を受けなくてはならぬ者が多いのであります。これが戦争に由つて婦人の感情の上を受くる激動であるのであります。

第二は婦人の仕事であります。前に申したやうに、男子は働き盛りの者が大抵戰場に出たから、婦人が是迄男子のやつて居つたやうな事をしなくてはならなかつた。その仕事には、婦人がやつたとはいふものの、随分無理な事がありはしなかつたか。戦争であるから非常の場合であるといふので、男子の體力を要し、或は男子の心力を要する仕事を、強ひて婦人がやつて居た事も随分ありはしなかつたと思ひま

す。今日婦人の職業が擴つて、婦人が如何に多方面に仕事をして居るかといふ事はかり見られて居つて、それが婦人の心身に如何なる影響を與へて居るか、どれだけ過勞をして居るかといふことは、案外看過されて居るやうであります。けれども後にも申すやうに、婦人が男子に代つて執つて居た、今も執つて居る仕事といふものは、必ずしも婦人の心身に適當のもの、又は適度のものでなく、過多の負擔を與へ、精神及び身體上に良い影響を及ぼさぬものが、澤山あらうと思ふのであります。神經衰弱とか、ヒステリーとかになる者も多いことであらうと思ふ。一方では新様に女子の能力が認められる。その能力が認められる裏面には、どれだけの犠牲が拂はれ、女子の心身を壊しつゝあるかといふことを、忘れてはならぬのであります。是迄は女の力が判らなかつた。今度の戦争で初めて女の力が知れたといふ事ばかり言つて、其一方に如何なる無理をして居るかといふことを、看過されて居るやうであるが、吾々は其兩方を考へなくてはならぬのであります。

第三は女子の獨身者の増加であります。西洋では平時でも、女子の方が男子よりも多い國がありまして、戦争前に英國の如きは、婦人が男子よりも百二十萬多かつた。一九一六年頃の話では、英國では結婚年齢の婦人の中で、四人に一人は結婚の見込の無い割になつて居たといひますが、今日は随分戦死したり、色々不具者なども出来ましたから、結婚の歩合は一層少くなつて、或は三人に一人は結婚出来ないことになつて居るかも知れぬのであります。是は英國ばかりではない。獨逸でも戦前には婦人の數が男子よりも八十餘萬超過して居り、佛蘭西でも三十萬女の方が多かつた。さなきだに多いのに、戦争の爲めに結婚盛りの男子が多數死んで、一層女子の結婚をむづかからしめ、獨身の婦人が一層多くなるのであります。中には主義の上から、男子が結婚を申込んでも厭やだといつて、初めから獨身主義を守つて居る者もありませうが、大多數は結婚はしたいけれども、事情已むを得ず、出来ないと爲めに、獨身で居る婦人である。しかしまた戦争で男子が澤山死ぬるから、あと又

産まねばならぬといふので、結婚奨励の會などが出来て、戦争中も結婚を奨めて居たのであります。或は負傷兵結婚成立期成會といふやうなものを、造つたら宜からうといつて居る者もありましたが、さういふ工合に果して女子が結婚するであらうか。負傷した勇者の血を受ければ、子孫に必ず勇者が出来るといふので、不具廢疾者であらうとも、婦人が結婚するであらうか。將來妻であると共に、夫の看護婦であり、母であり、又一家の生計を立てる責任者となるといふことを承知の上で、さうといふ名譽有る勇士であつても、生活上役に立たない所の男子の、配偶者たる女子が、果してどれ程あるであらせうか。かやうに生残つて還つて来た男子に對して、婦人が必ずしも結婚を求めるといふこともあるまい。さうすれば婦人の獨身者は勢ひ多くならざるを得ないのであります。さうするといふとその獨身の婦人は何うなるか。又縦令さういふ男子と結婚する者があつても、それは恐らく愛情を本として成立した結婚ではない。愛情以外の動機から成立つた所の結婚である。義侠的

結婚である。その間には眞の愛情が湧かないものであり、夫も薄弱であれば、さういふ結婚に因て生れたところの子供は、大體に良くないであらうと思はれるのであります。

三

以上申したやうに、この戦争の爲めに女子に起る著しい事は、女子の感情の非常なる激動といふ事と、その過勞といふ事と、それから獨身が多くなる事とであると思ふのであります。まだ其外にもあるか知れませぬが、こゝには是丈に就て申さうと思ふ。この三つの事がどういふ風に、女子自身、家庭、及び社會に影響するかといふ事を少し考へて見たい。それに就ては順序として、先づ婦人の身體が一體どういふものであるか、それから心理的變動が、女子の身體に如何なる影響を及ぼすかといふ事を、簡単に話して置かうと思ふのであります。

婦人は男子から見ますと、血液が稍薄いのであります。英國のロイド・ジョーンズといふ人が、男女の生涯を通じて、血液の比重を出生時から老年に至る迄検査したのがありますが、それを見ますと、十五六歳以後は何時も男子の方が血の比重が重い。女子の方は六十八九歳から、男子よりは血の比重が重くなつて居りますが、是は詰り女子は老年に血が濃いといふことであつて、女に長命をする者の多いのは、一は其爲めであると言つて居りますが、それは兎に角、働き盛りの時代は婦人の血液の比重が、男子よりも軽いのであります。而して又其血液の中に有る赤血球の数は、學者に依つて多少數字が違ひますが、ウエルケルの調査に依れば、一立方ミリメートルの血液の中に有る赤血球が、男子の方が約五百萬で、女子の方が四百五十萬である。赤血球の中に血球素といふものがある。それが酸素を取つて居るので、活力の素になるのであります。随つて赤血球の数の少いといふことは、身體の精力と關係があるので、女子のエネルギーが男子のエネルギーよりも劣つて居るといふ